ACRYLART

アクリラート別冊2007



The Scholar 20 Perspective

The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊 2007

holbein

ごあいさつ

かつては「美術」という言葉を聞いて、ほとんどの人が絵具によって描かれた絵画をまず当然のように想起した時代がありました。現在では、美術の有りようもすっかり変わり、特に現代美術の分野では絵画や彫刻といったジャンルの枠を超え、映像を使ったものやコンセプチュアルなものまで多様性を極め、絵具というものは、あらゆる素材の一部に過ぎなくなってしまいました。また、時代とともに、作家と素材との関わり方も変わり、いにしえの画家たちが自身の工房で絵具を手練りしていた時代から、産業の発達による分業化の時代を経て、いつしか画家と材料提供者とは別になってゆきました。現代は、すぐに使える状態のあらゆる色材がいつでも画材店で手に入る、実に便利で合理的な時代と言えます。しかし作家の負担が大幅に軽減された一方、作家と素材との間にある距離ができてしまったことは否めません。色材を提供する側には、その距離を縮める努力が求められます。作家の本当に望むものは何か。その創意と技術に可能な限り応え、その精神をマテリアルとしてより正確に再現できる素材の提供こそが、私たち絵具を製造する側の最終的な目標だと言えるでしょう。

１年間にわたる色材の無償提供によって若手作家を支援し、現代美術の振興を目的としたのがホルベイン・スカラシップ奨学制度です。これまでに900余名にのぼる奨学生を認定し、この冊子でご紹介する作家たちで、ついに第20期生となりました。時代の変化とともにアーチストの志向も変わり続けます。常に制作の現場に寄り添いながら、そのフィードバックによって、時代に応じた素材の研究を続けてゆくことも、私たちの使命だと考えています。

2007年6月

ホルベイン工業株式会社
スカラシップ実行委員会

The Scholar Perspective 20

Contents

第20回奨学者（五十音順）

池田恭子 IKEDA Kyoko …… 12・34

石井友人 ISHII Tomohito …… 13・37

今村　綾 IMAMURA Aya …… 14・40

大槻　透 OTSUKI Toru …… 15・43

奥田文子 OKUDA Ayako …… 16・46

川口奈々子 KAWAGUCHI Nanako …… 17・49

喜多見ひろ子 KITAMI Hiroko …… 18・52

鮫島大輔 SAMEJIMA Daisuke …… 19・55

須貝一穂 SUGAI Kazuho …… 20・58

詫摩昭人 TAKUMA Akihito …… 21・61

塚本智也 TSUKAMOTO Tomoya …… 22・64

橋本祐一 HASHIMOTO Yuichi …… 23・67

早川克己 HAYAKAWA Katsumi …… 24・70

廣江友和 HIROE Tomokazu …… 25・73

藤部恭代 FUJIBE Yasuyo …… 26・76

牧ゆかり MAKI Yukari …… 27・79

増田佳江 MASUDA Kae …… 28・82

室井公美子 MUROI Kumiko …… 29・85

矢部奈桜子 YABE Naoko …… 30・88

渡辺　豊 WATANABE Yutaka …… 31・91

The Scholar Perspective 20

Works

第20回奨学者の作品



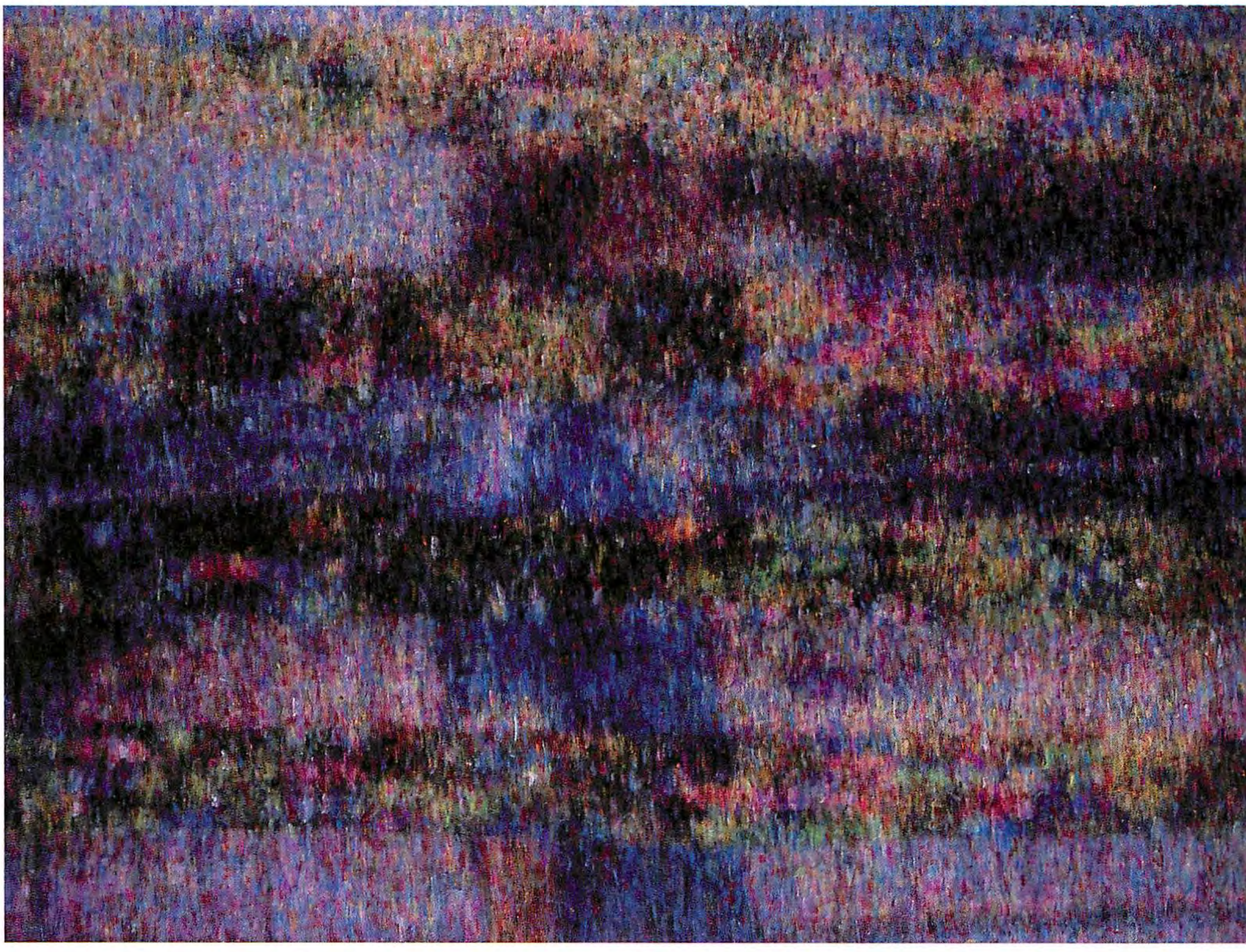
池田恭子

Rain in January

パネル、アクリル

65.0 × 50.0 ㎝

2006 年



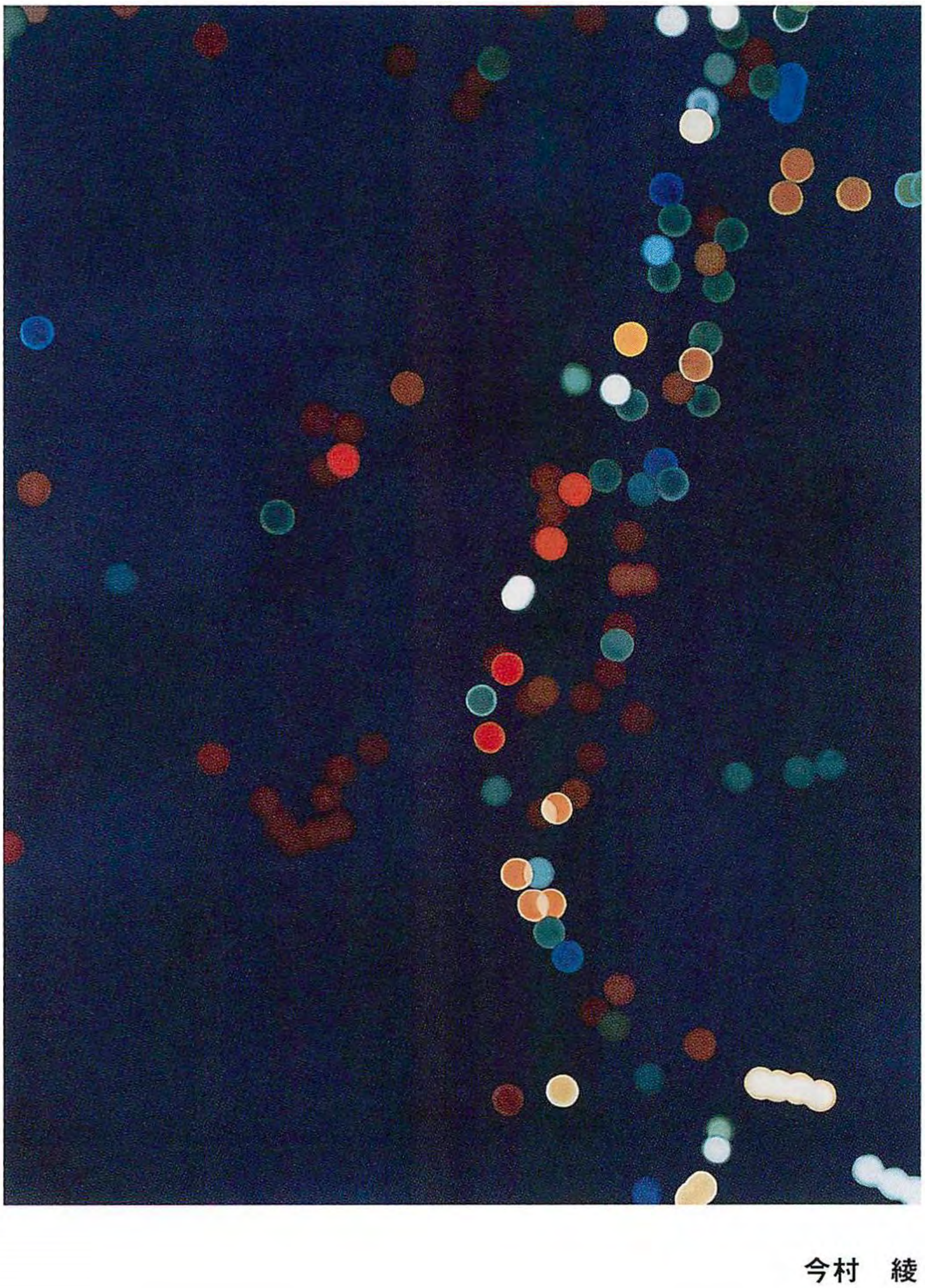
石井友人

BLOCK NOISE IMAGE(self portrait)

キャンバス、油彩

145.6 × 193.7 ㎝

2006 年



今村　綾

swarm Ⅳ
キャンバス、油彩
145.5 × 112.0 ㎝
2006 年



大槻　透

不忍池 - 夏　その 1、その 2、その 3
パネル、油彩、水彩、テンペラ、金箔、ラインストーン、布
180.0 × 70.0 ㎝× 3 点
2006 年
photo by　坂本阡弘



奥田文子

untitled
綿キャンバス、油彩
162.0 × 162.0 ㎝
2007 年



川口奈々子

Little Red Riding Hood

キャンバス、油彩

145.5 × 97.0 ㎝

2007 年

photo by　木奥惠三



喜多見ひろ子

A's フレンズ 1

パネル、綿布、アクリル、油彩

180.0 × 180.0 cm

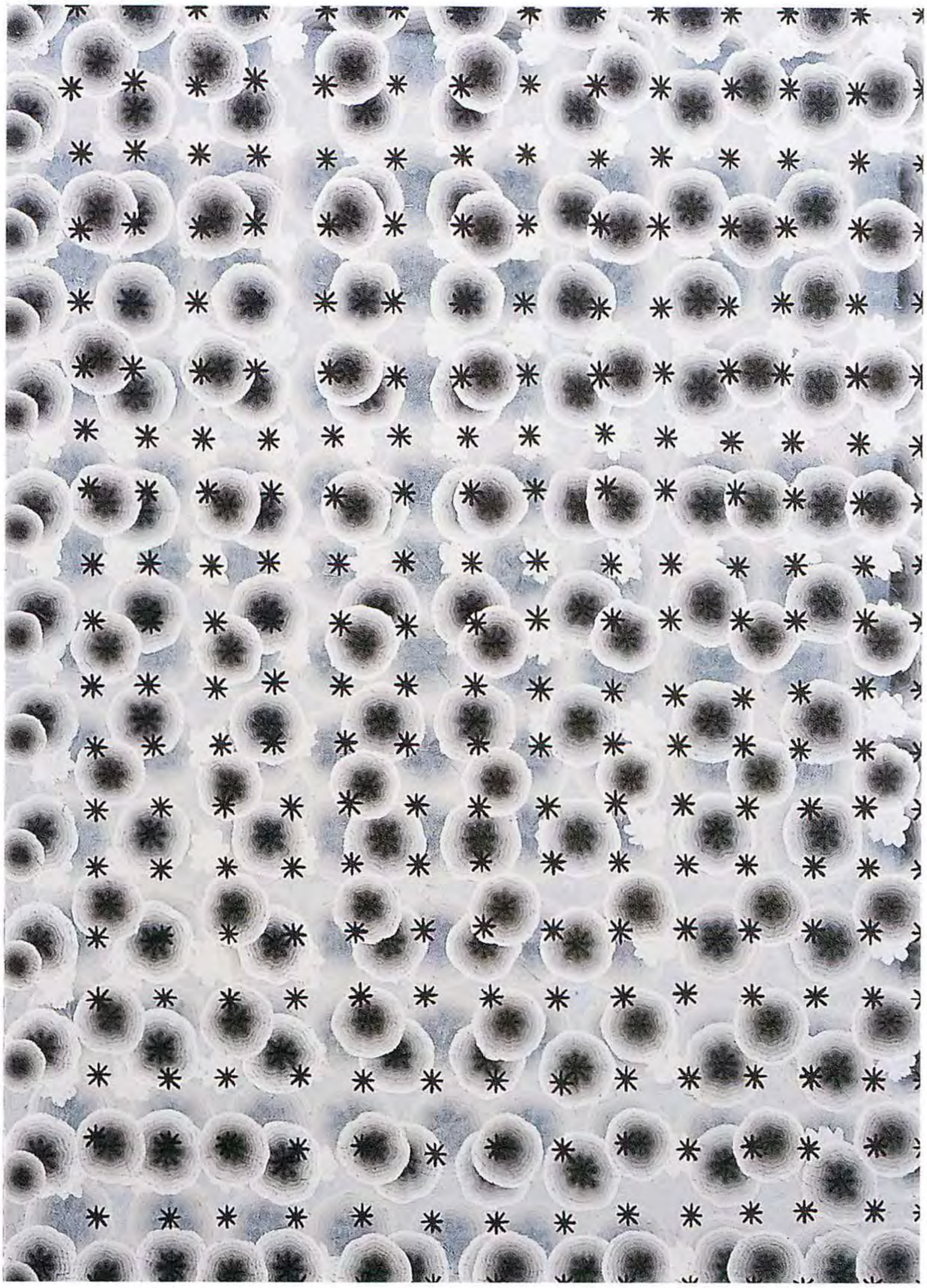
2006 年

photo by　戸島大輔



鮫島大輔

Long Distance 2006
木、アクリル
240.0 × 240.0 × 240.0 ㎝
2006 年



須貝一穂

everyday-14
キャンバス、油彩
180.0 × 130.0 cm
2006 年
photo by　柳場　大



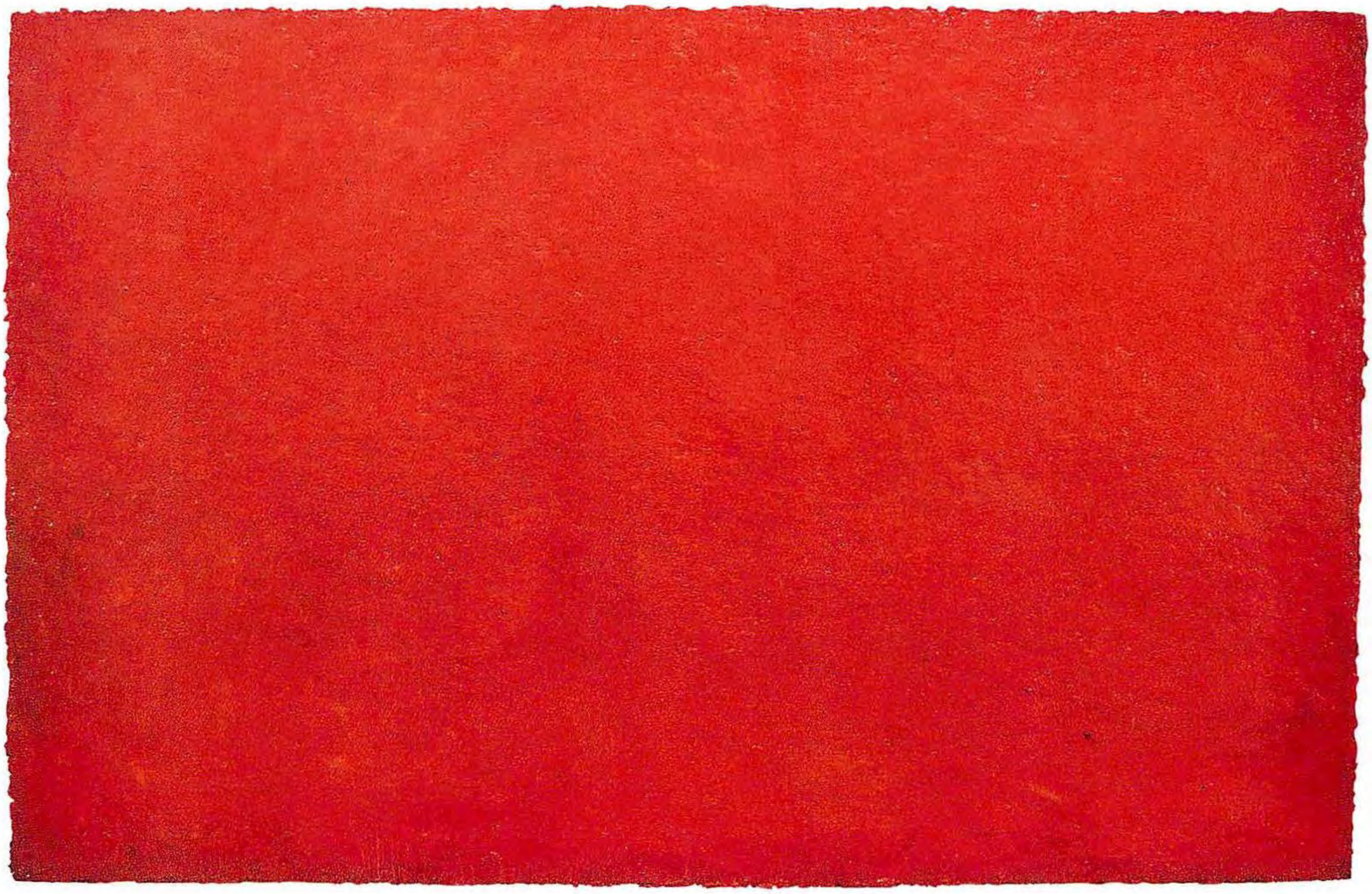
詫摩昭人

逃走の線
綿布、油彩
145.5 × 112.0 cm
2006 年



塚本智也

森の中へ
キャンバス、油彩
181.8 × 227.3 ㎝
2006 年



橋本祐一

絵画（未完）
キャンバス、油彩
178.0 × 280.0 ㎝
2004 ～ 2007 年



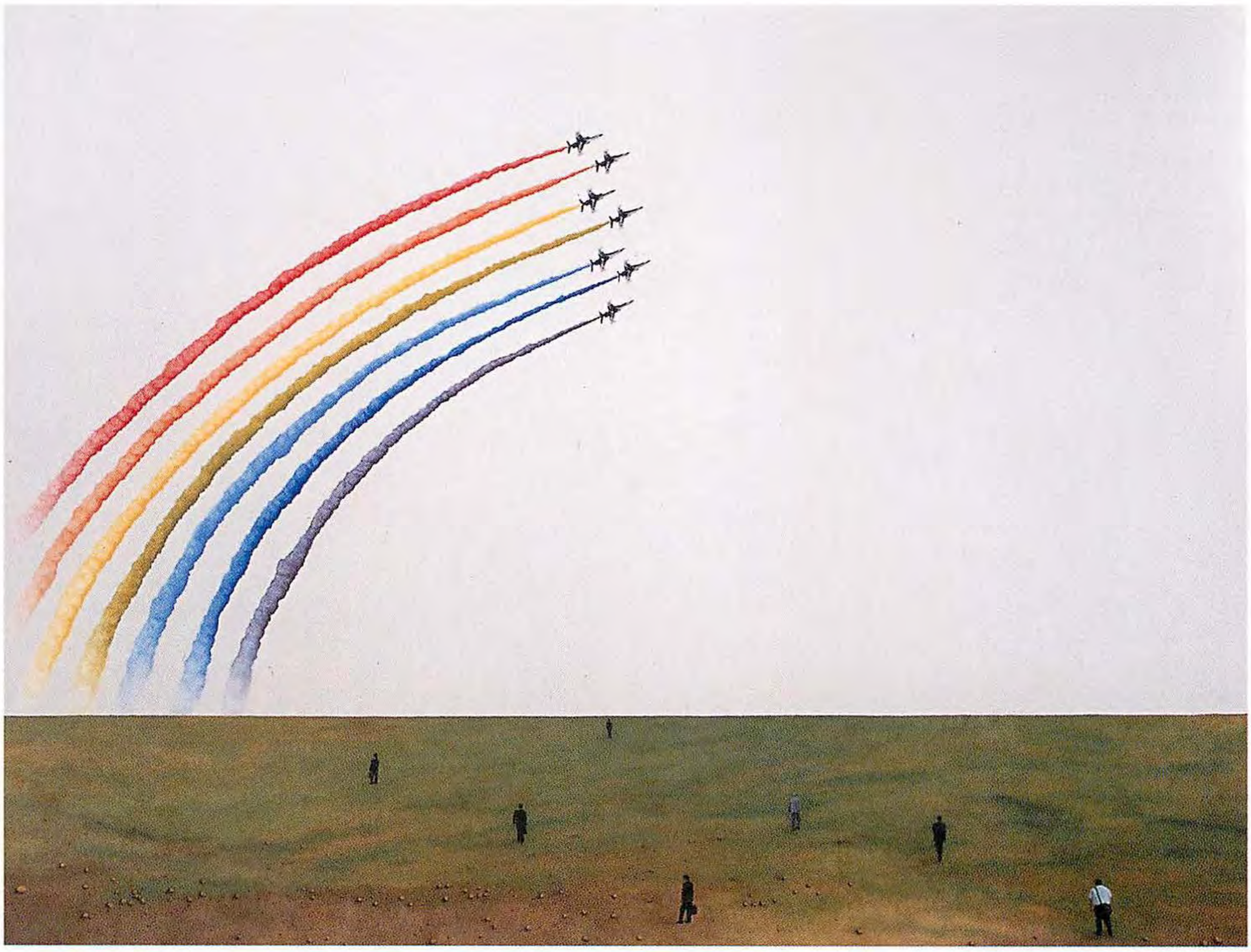
早川克己

Microsphere

キャンバス、アクリル、油彩

183.0 × 107.0 cm

2007 年



廣江友和

seven samurai
パネル、キャンバス、油彩
112.0 × 145.5 ㎝
2006 年



藤部恭代

Sacrificial corsage

麻布、油彩

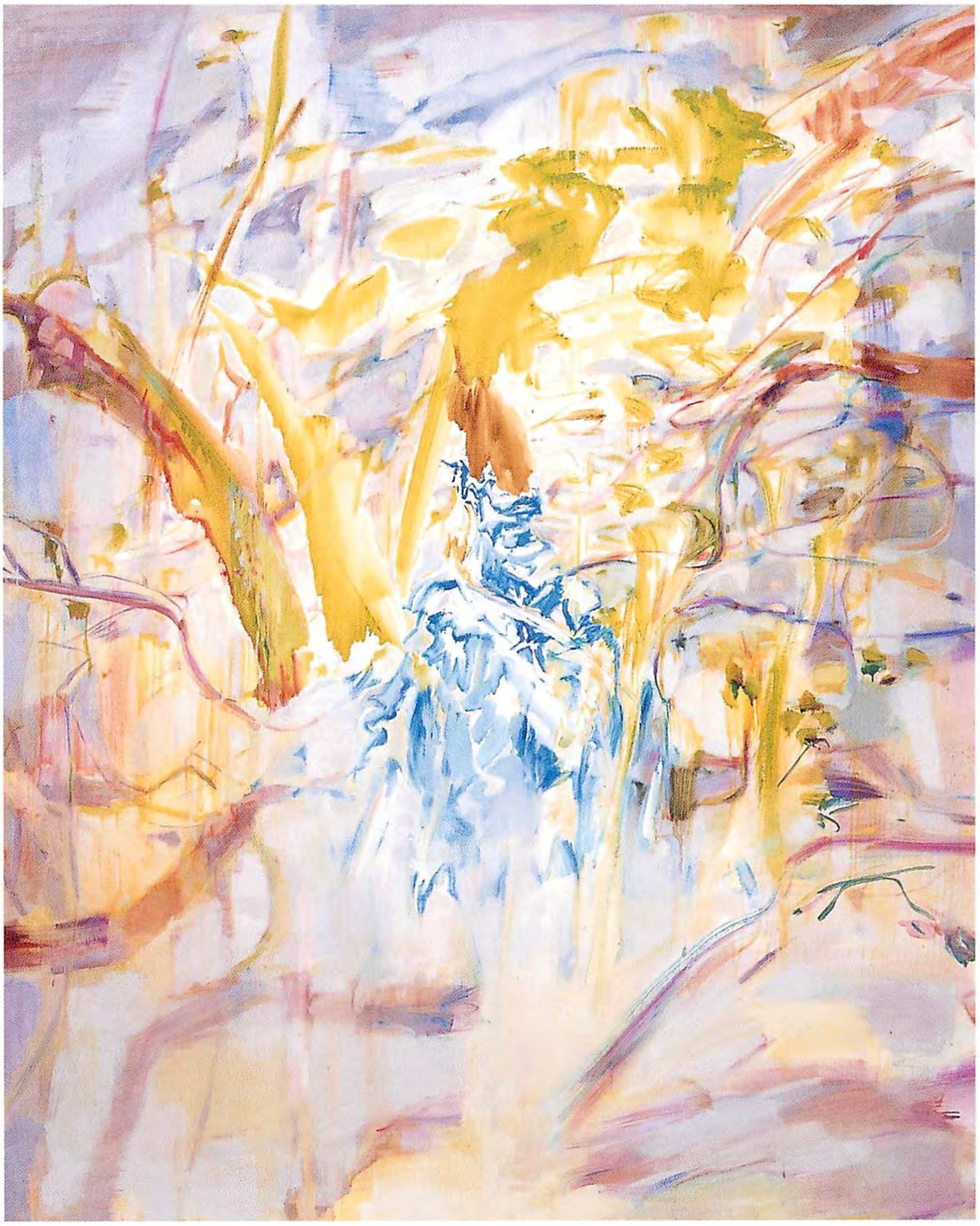
116.7 × 91.0 cm

2007 年



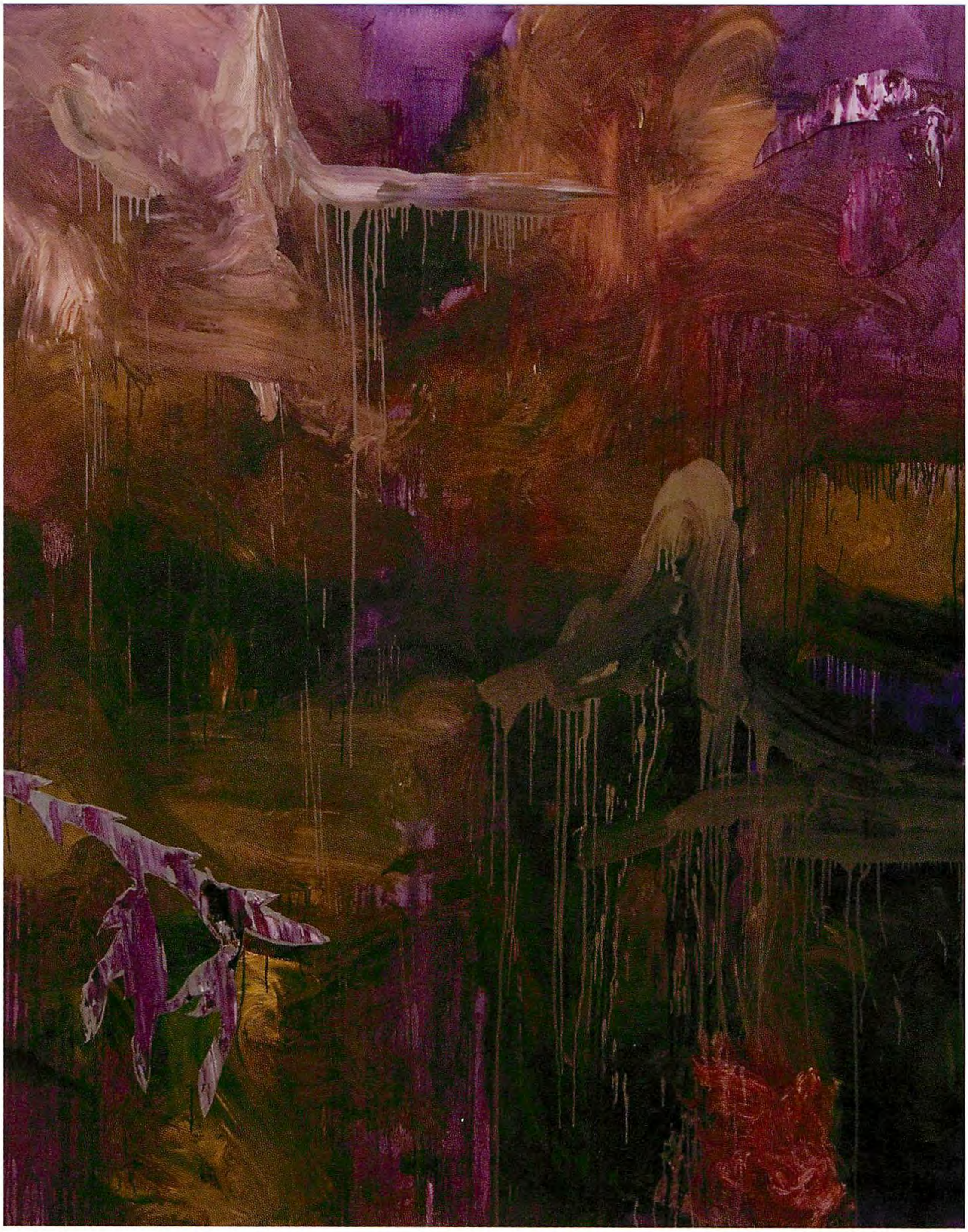
牧ゆかり

face
紙、インク、水彩、色鉛筆
79.0 × 55.5 ㎝
2007 年



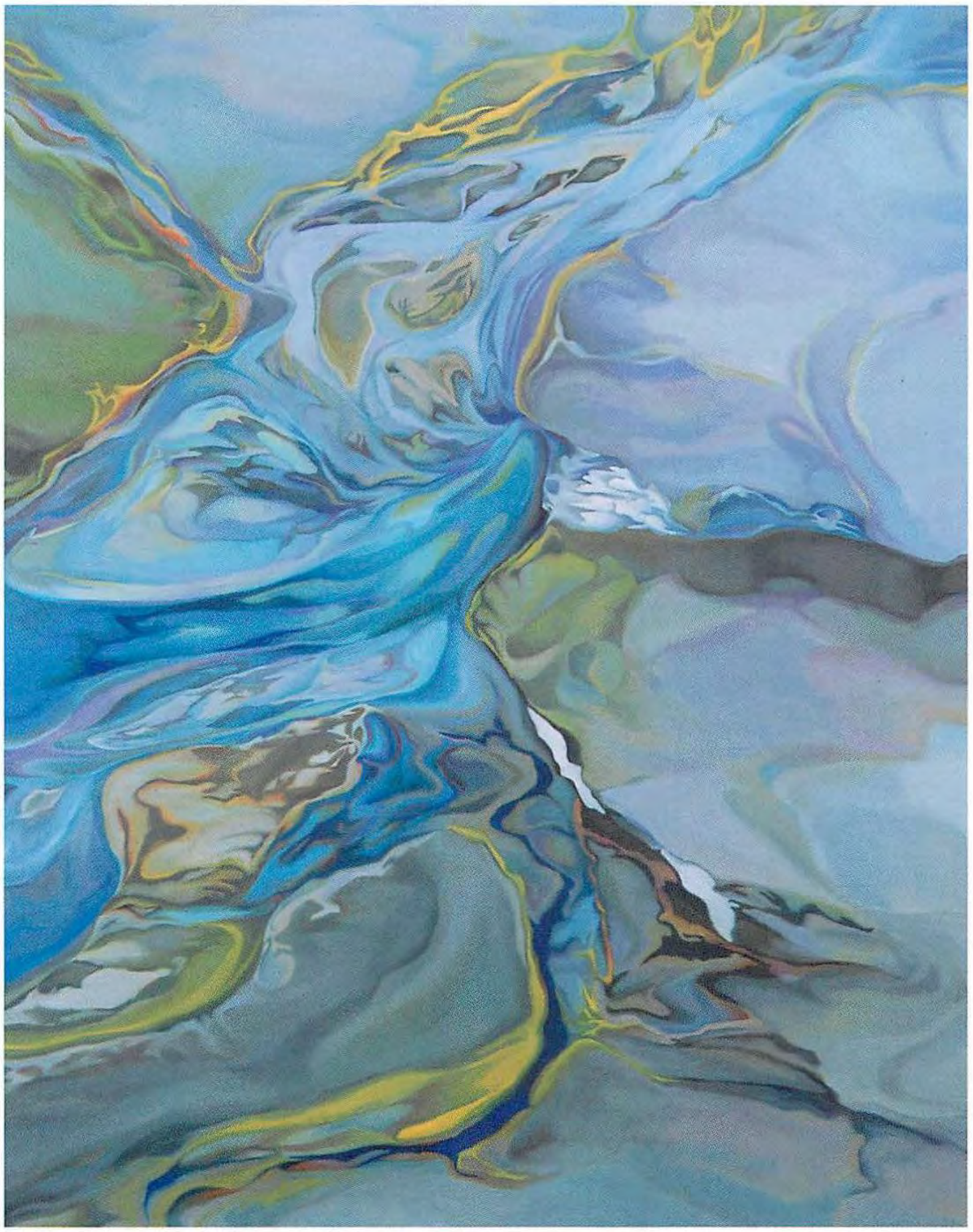
増田佳江

空の巣
キャンバス、油彩
162.0 × 130.3cm
2006 年
photo by　怡土鉄夫



室井公美子

廻航
キャンバス、油彩
250.0 × 180.0 ㎝
2006 年
photo by　王丹戈



矢部奈桜子

view
キャンバス、油彩
91.0 × 73.0 cm
2006 年



渡辺　豊

なお待つ終わり
キャンバス、油彩
130.3 × 162.0 ㎝
2007 年
photo by　柳場　大

The Scholar 20 Perspective

Report Enquete

第20回奨学者のレポートより

IKEDA Kyoko

池田恭子

記憶のかたち

『過去は記憶にしか存在しない。記憶は常に新しく塗りかえられ、曖昧になる』

私はある日、思い立って生い立ちを辿ったことがあります。しかし、そこで目にしたものは、私が思い描いていた懐かしい場所ではありませんでした。幼い頃過ごしていた家はなく、遊んでいたはずの公園や小川までも無くなっていました。記憶が不確かなのか、私自身がそこには存在していなかったのかと恐怖と不安に襲われたことがあります。

幼い頃の記憶の場所は、私だけの場所となり、私と共に消滅する場所になりました。

私は記憶という曖昧なものに、真実を探し、今があると感じました。

『生まれる前の記憶は体に刻まれて、現在の私は過去の記憶で作られて行く』

そして私はすべてが「無」になる瞬間に発生する恐怖と欲望との根源に横たわるものを、私自身の内面的なアピールとして表現している。



Hidden place（展示風景）
パネル、アクリル
194.0 × 390.9 cm
2005 年
photo by　佐藤太志朗



個展会場風景（日仏会館）
2005 年
photo by　佐藤太志朗



池田恭子

1973 年　新潟県生まれ
1995 年　創形美術学校研究科造形課程修了
2000 ～ 2001 年　第 16 回パリシテデザール派遣

個展
1996 年　コートギャラリー国立／東京
1997 年　コートギャラリー国立／東京
1998 年　スカイドアアートスペース青山／東京
2001 年　cite internationale des arts ／ paris〔FRANCE〕
2005 年　日仏会館／東京
2006 年　ガレリア・プント／東京

グループ展他
1995 年　NININ - TEN　くにたち市民芸術小ホール／東京
第 5 回中華民国国際ドローイング展／台北〔台湾〕
1999 年　each one - 視点　ギャラリースペース 88 国立／東京
群馬青年ビエンナーレ　群馬県立近代美術館／群馬
2001 年　EXPOSITION COLLECTIVE 2001　cite internationale des arts ／ paris〔FRANCE〕
2004 年　GLOBAL ART IN KOREA - JAPAN Regards sur japon　villa st cyr ／ Bourg-la-reine〔FRANCE〕
2005 年　アジアの息吹　銀座中和ギャラリー／東京
Contemporary Artists Exhibition from JAPAN　Zainul gallery ／ Dhaka〔BANGLADESH〕
2006 年　具象と抽象の狭間に陥った者達　プロムナードギャラリー／東京

ISHII Tomohito

石井友人

発想源となる未成熟なムードが現実や状況から引き離され震えた映像に溶け込む。

周りの色は何処からでもやって来て、ある瞬間、時間や場所、エネルギーを反映し世界を根源的に気分づける。

再現性は感じた瞬間、非力な神経の接続で体と色とが結びつき生きた事実を生み出す。だから、イメージ内の解像は感じた色と積み上げられた画像の崩れかかる二重性を帯び、イメージはこの意識のスイッチングを行いながら、休みなく変化して生成される。

信号の発想は、イメージは見えるもの（あらゆる表示されたもの）を単純に前提とは出来ない矛盾した環境から生まれている。

信号は視覚の自然な感応に対して開かれた、ある純粋さに向けられている。

生きているリアルさは宙吊りにされ、虚空を見つめていると感じる。だから、透明なエディターで開けて自分なりの新しい意志を見出す。

同時的な複雑さ、よく目を開いて世界を見ること。

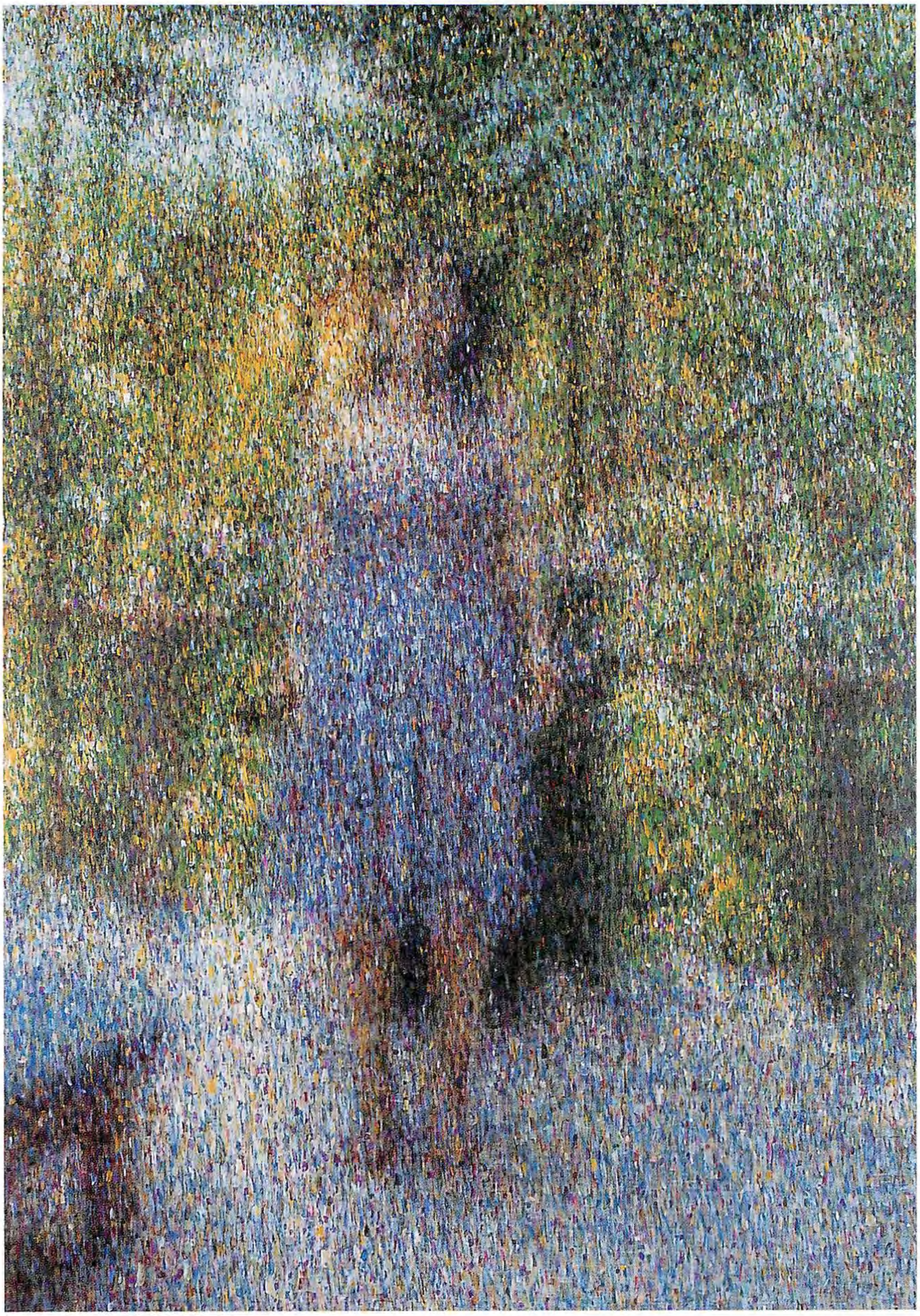
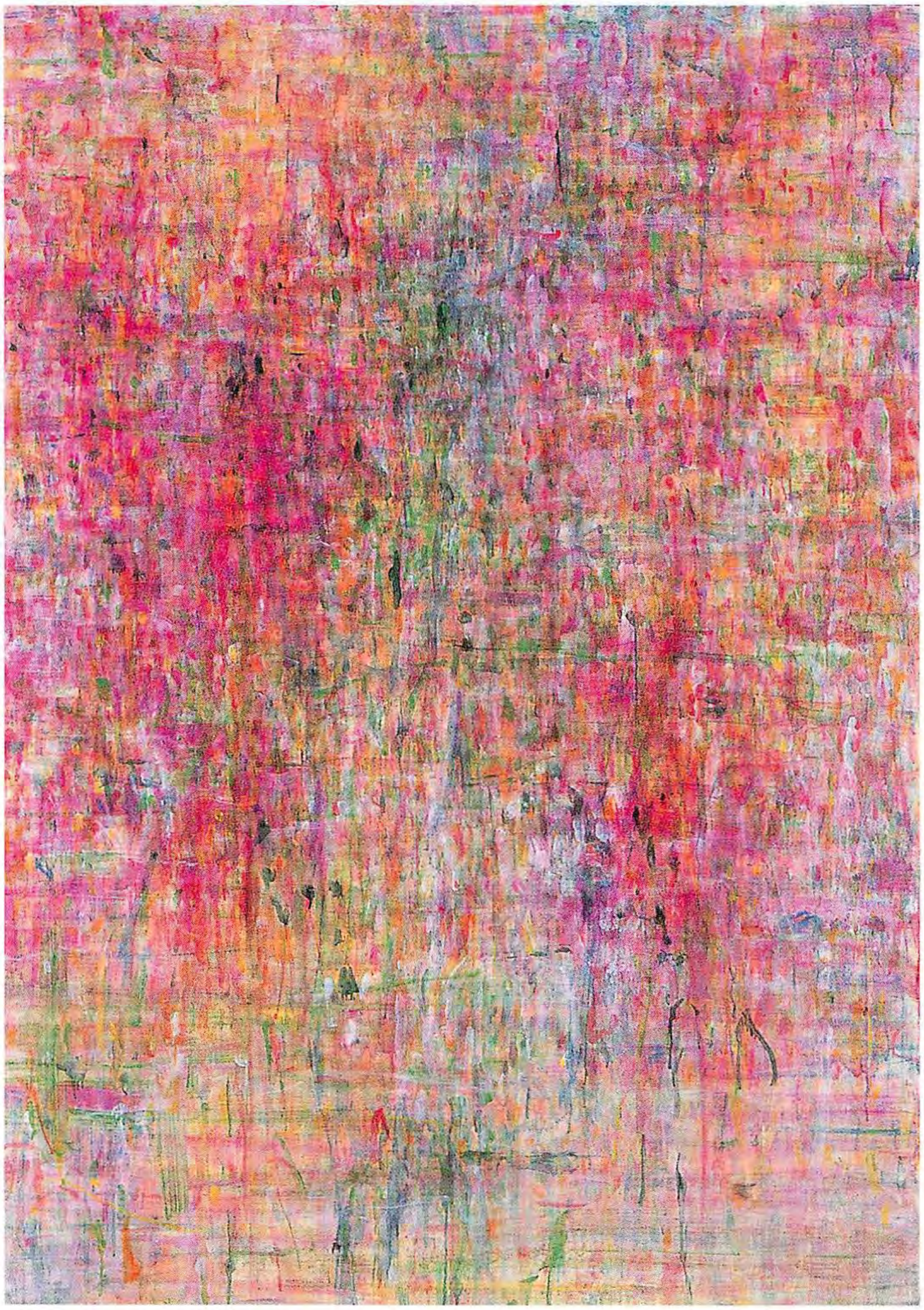


Image 6(figure)
キャンバス、油彩
230.0 × 163.5 ㎝
2006 年



Signal 6(figure)
キャンバス、油彩
183.0 × 130.2 ㎝
2006 年



石井友人

1981 年　東京都生まれ
2006 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科油絵コース修了

グループ展他
2005 年　from/to #3　WAKO WORKS OF ART ／東京
2006 年　二人展　WAKO WORKS OF ART ／東京
2007 年　Portrait Session　広島市現代美術館／広島
Portrait Session @ NADiff　NADiff ／東京

IMAMURA Aya

今村　綾

距離をはかる

制作に入るとき、制作をしているとき、私は常に距離をはかる。意図的では無いが気が付くといつも自然に距離をはかっている。

制作はモチーフを選ぶことから始まる。私は、自分が心躍る情景を目にしたときの感動を『眼にオイシイ』と表現する。美しいとか、きれいとか、そういう言葉はどこか画一的でしっくり来ない。それに比べて、オイシイは個人によって基準が違う。年齢や性別によっても感じ方は違うし、広義に使われる。

『眼にオイシイ』は、日々当たり前のように目に飛び込んでくる情景の中にあって、対象に吸い込まれるようにのめり込み、鼻先が触れそうなほどに近い距離もあれば、目を細め見えるか見えないかのような遠景を捉えることもある。心地よい焦点距離。そこが『眼にオイシイ』距離なのである。

しかし制作に取り掛かると、気持ちと画面との距離を一定に離し保つ。

モチーフは無意識のうちに様々な知識や精神的な影響を受け、私的な感覚と価値観のもとで選りすぐられてしまう。そこから主観的なものをできるだけ排除し、ただの視覚的情報へと浄化する。『眼にオイシイ』情景のありのままを、ただそれだけの姿を表現したいのだ。

情景から物の輪郭や色の境界線をたどっていく。自由に走るような線ではなく、確実に実在するフォルムにのって線を歩ませる。それは、初めて目にした遠い国の言語を形だけ追って書き取る作業のように、意味の有無に関わらず淡々と行われる。

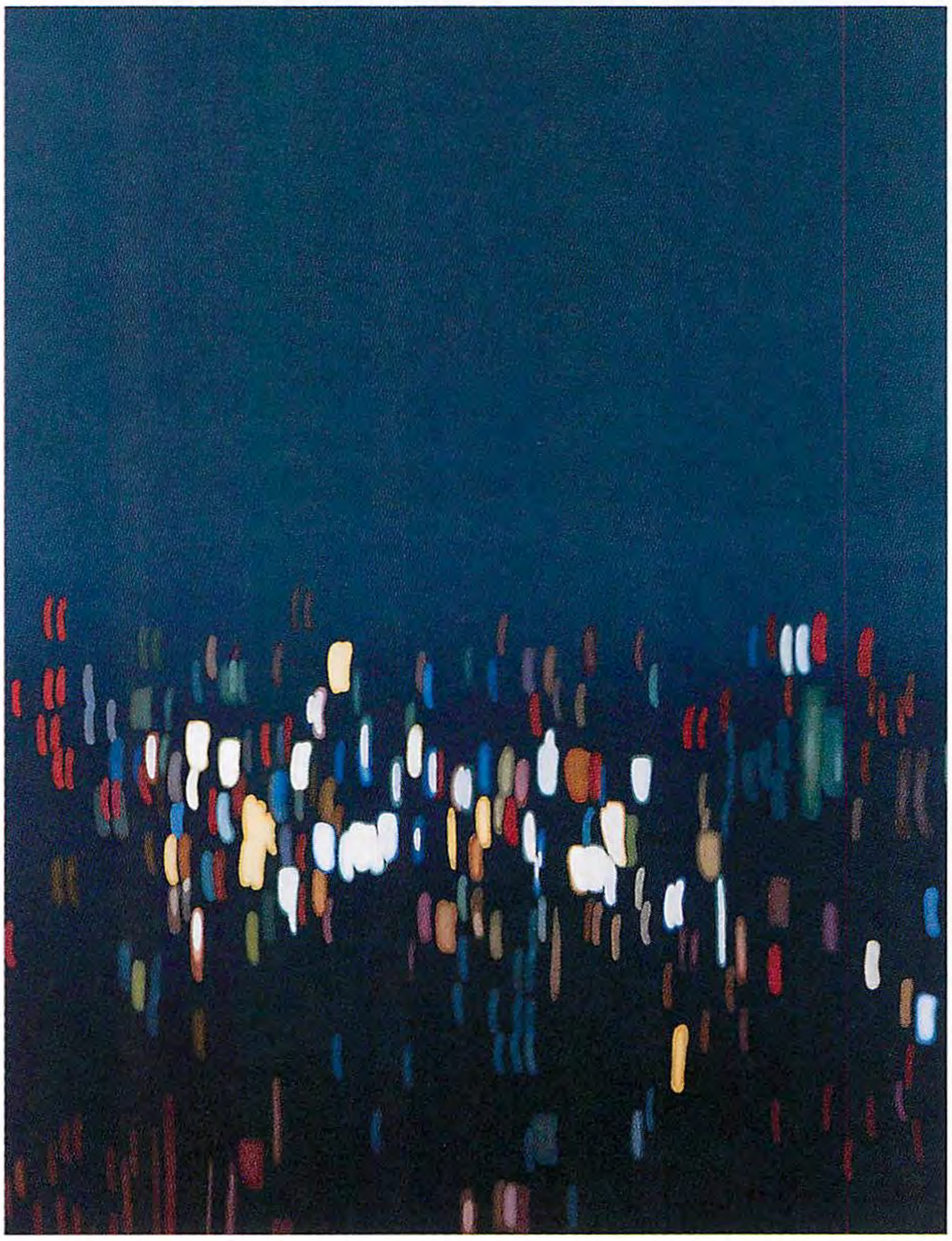
浄化された画は意味の無い一つの風景に戻り、そこからまた距離をはかり直すことができる。私を含め鑑賞者がその時々の感覚で距離をはかり、個人個人の気持ちに自然に寄り添い、新たに意味を生み出すものでありたい。

しかし、私が努めて消そうとする当初の感情は、距離をはかろうとするほどに浮き彫りになっていくような気がすることがある。気持ちの小さな浮き沈みを押し殺し、日々を平坦に過ごそうとする自分の気質そのものが露呈しているようで、ときに居心地の悪さを感じてしまう。この矛盾とどう向き合っていくのかが当面の課題である。



swarm Ⅲ
キャンバス、油彩
145.5×112.0 cm
2006 年

swarm Ⅱ
キャンバス、油彩
145.5 × 112.0 ㎝
2006 年





今村　綾

1980 年　福岡県生まれ
2005 年　女子美術大学大学院美術研究科美術専攻修了

個展
2006 年　Oギャラリー／東京

グループ展他
2003 年　女子美術大学大学院 1 年展　　ギャラリー青羅／東京
2004 年　シェル美術賞展 2004　　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2005 年　女子美術大学大学院 2 年展　　ギャラリー青羅／東京
JAM session 2005 女子美教員作品展　　女子美アートミュージアム／神奈川
Exhibition JAFA　　art space hue ／ソウル〔韓国〕
第 41 回神奈川県美術展　　神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
2006 年　第 3 回 REUNITED 展　　横浜市民ギャラリーあざみ野／神奈川

OTSUKI Toru

大槻　透

女性を描くということ

私は季節の中で夏から秋にかけての時期が一番嫌いです。長い梅雨が終わり、やっと半袖のシャツに袖を通したかと思うといつの間にか日が短くなり草木が紅く染まってきます。そして今年も夏を満喫できなかったなーと後悔します。

私の中で理想の夏というものがあります。それは幼い頃、本の挿絵かポスターなどで見た、真っ青な空に白い入道雲、そしてエメラルドグリーンの海の砂浜にヤシの木が立っているという、気恥ずかしいほど典型的な海辺のイメージです。そのイメージが未だに頭の中にこびり付いていて、長い間に美化され、理想化されているのだと思います。実際その夏は、どの時期に何処へ行けば出会えるのか自分でも分かりません。所詮、妄想なので存在するはずがないと分かっていても、私は理想の夏を求めてちょっとだけ努力します。

夏が近づくとまずサーフミュージックやボサノバなど夏っぽい音楽を普段からかけるようにします。そして夏真っ盛りになれば、出不精なりに頑張って海に行くようにしたり、花火大会に行ったり、不忍池の周りを散歩して蓮を見たり、生活範囲内で、夏を感じることが出来ることはなるべくするようにしています。ですが、まだ自分を満たすような夏を送ったことはありません。理想の夏の像を超えるということは、永遠に出来ないのかもしれません。

夏に限らず、春夏秋冬どれをとってもこのような何かしらの思い入れがあります。

季節が変われば自ずと草花の表情が変わり、鳥の生活拠点が移り、女性は衣替えをします。

女性は季節の変化にとても敏感です。季節の移り変わりを素早くキャッチし、服、アクセサリーはもちろん湿度の変化による肌の手入れやその季節に合ったメイク、髪型など、男性には考え付かないほど気を使っていると思います。更にその時代の流行という、とても大切な要素も加わります。

流行というものは華やかで何にもかえが

たいパワーがあると思います。しかしそれが持続するとは限りません。例えば、誰もが口ずさめるほどテレビやラジオで流れていた歌が、いつの間にか忘れ去られてしまうということは日常茶飯事です。人々の一時の欲を満たすためだけに消費されているかのようです。散々騒ぎ立てたものでも一旦流行りからそれると見向きもされないばかりか、嫌悪される場合さえあると思います。

たまにふと過去に流行ったものを思い出す瞬間があります。その時ノスタルジックな気分になると同時に、そんなものが流行ったことすら忘れていた自分に驚きます。そして、流行とはなんて果かなく、むなしいものなのだろうとつくづく思います。

浮き沈みの激しい流行を貪欲に取り入れて、季節の変化とともに一瞬一瞬を美しく生きていく女性は、その時代の世の中を象徴している存在だと思います。そのような女性を描くことで季節に対する思い入れや理想、時間の流れの移ろいや果かなさ、一瞬の美を表現していきたいと思っています。



夏の終わり
パネル、油彩、テンペラ、金箔、ラインストーン
145.5×112.0cm
2006年
photo by　坂本阡弘



梅雨
パネル、油彩、水彩、テンペラ、
金箔、ラインストーン、布
100.0 × 40.0 ㎝
2006 年
photo by　坂本阡弘



大槻　透

1973 年　福島県生まれ
2004 年　東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画技法・材料第 2 研究室修了

個展
2004 年　トーキョーワンダーウォール／東京
　　トーキョーワンダーサイト／東京
　　ギャラリーニケ／東京
2005 年　ギャラリーニケ／東京

グループ展他
2002 年　escenas　ギャラリー毛利／東京
2003 年　ONE DAY ONEMAN SHOW　東京藝術大学校内／東京
　　ART BOX 大賞展受賞記念展　ART BOX ギャラリー／東京
　　絵のある部屋　SPICA art ／東京
　　Camp part 03 ～スピ Cafe ～　SPICA art ／東京
2004 年　トーキョーワンダーウォールの作家たち展 2000 ～ 2003　東京都現代美術館／東京
　　Tokyo Designer's Week 2004 コンテナ展　お台場／東京
2005 年　トーキョーワンダーサイト 0 号展　トーキョーワンダーサイト／東京
　　Think Ahead 第 4 回中径展　府中市美術館市民ギャラリー／東京（'06）
2006 年　大槻透・松田一聡展　ギャラリーニケ／東京
　　大槻透・福井直子展　SPICA art ／東京

OKUDA Ayako

奥田文子

制作について

私は、気持ちのいい絵が見たい、気持ちのいい空間が作りたいと思って制作をしています。

きれいだと思うもの、光と影の境界線、もやもやしたもの、空と地面や海の境界線。

絵を作るとき、絵の具の物質がそれらのつかめないものを画面としてモノにしてしまうという不思議な現象が起きます。油絵の具の質感、重さが、ぼんやり見ていたもの、なんとなく感じていた空気をはっきりと見せてくれるような気がするのです。

数年間、作品と自分とのちょうどいい距離を探りながら、歩み寄ったり、離れてみたりを繰り返しながら制作を続けてきました。

作品のモチーフにしているのは、風景の写真です。

写真をモチーフに使うことで、自分の中から出てきたものではないものを使うことで、作品との距離をとっています。

それは、作品が自分の中にあるものだけで終わってしまわないようにするための手段だと思っています。また、自分の感覚や手の動きよりも、目で見えるものを信用しているのかもしれません。

この数年の制作の中で、作品が少しずつ変化してきました。

最近の作品では、もっと自分から絵をつくることが多くなったように思います。

一枚の写真から絵を作っていた作品から、写真を組み合わせて作るようになり、風景だけの作品から、人や車、建物などが登場するようになりました。

少しずつ、恐る恐る自分の手を加えていっています。これからどのように変化していくのかを、自分でも楽しみにしています。



untitled
綿キャンバス、油彩
162.0 × 162.0 cm
2007 年

untitled
綿キャンバス、油彩
116.7 × 116.7 cm
2007 年





奥田文子

1980 年　大阪府生まれ
2005 年　大阪教育大学大学院教育学研究科修了

個展
2004 年　gallery wks. ／大阪
2005 年　STREET GALLERY ／兵庫
2006 年　gallery DEN ／大阪
2007 年　gallery wks. ／大阪
gallery DEN ／大阪にて 7 月 16 日～ 28 日迄開催予定

グループ展他
2001 年　グループ展　SUMISO ／大阪
2002 年　吉原治良賞美術コンクール展　大阪府立現代美術センター／大阪（'04）
2003 年　京展 2003　京都市美術館／京都
熊谷守一大賞展　アートピア付知交芸プラザ／岐阜
2005 年　夢広場はるひ絵画ビエンナーレ　はるひ美術館／愛知
P & E 展　アートコートギャラリー／大阪
美浜美術展　アートピア付知交芸プラザ／福井
2006 年　ワンダーシード 2006　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
奥田文子・早川知加子展　GALLERY MoMo ／東京
シェル美術賞展 2006　代官山ヒルサイドフォーラム／東京

KAWAGUCHI Nanako

川口奈々子

作品について

一瞬何かの遊戯を始めるかのように、少女は影を現す。脳内森林から流れる川は、少女の髪の毛へ。三つ編みはグルグルと絡み合いながら森の空に。溶ける山。流れる河。熊の独り言。

トレーシングペーパーを使いドローイングを行うようになってから、私の中でイメージの連鎖が続いている。自身の世界を常に往復することが重要であり、ドローイングを何度もトレースし、形を徐々に変化させ、線をつなぎ、新しいイメージが出てくる瞬間を模索する。

私は、次々と繋がってゆくイメージの連鎖を大切にし、様々なモチーフを行き交いながら、自身の世界を追求してゆきたい。

モチーフを構成してゆく時、そこに具体的な物語や、意味は存在しない。トレーシングペーパーにモチーフを重ね合わせ、予期していないイメージの破綻を期待しながらも、自身の感覚に重なり合う部分を探し出してゆく。私にとってイメージを探る作業は、掴むことのできない虹を追いかけるようなもののように感じる。

いくつかのモチーフを描く中で、自身でコントロールできないものの存在や、溢れ出す何かという漠然としたイメージは、河の



Buddha's family-twins
キャンバス、油彩
130.3 × 162.0 ㎝
2007 年
photo by　木奥惠三



mirror 2
キャンバス、油彩
80.3×80.3㎝
2007年
photo by　木奥恵三



川口奈々子

1978年　大阪府生まれ
2005年　京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了

個展
2003年　同時代ギャラリー／京都
2005年　Gallery IWANAGA:ARTZONE／京都
　　Oギャラリーeyes／大阪
2006年　Galeria punto zero／岡山
　　INAX GALLERY 2／東京
2007年　Yuka Sasahara Gallery／東京

グループ展他
2004年　ART CAMP in CASO第2期　海岸通ギャラリー・CASO／大阪
2005年　第1回倉敷現代アートビエンナーレ西日本　倉敷市立美術館他／岡山
　　トーキョーワンダーウォール公募2005　東京都現代美術館／東京
　　Tourbillon Ⅲ　Oギャラリーeyes／大阪
2006年　京都府美術工芸新鋭選抜展　京都文化博物館／京都
　　Drawing-Exposed essence 06　Oギャラリーeyes／大阪
2007年　2007ヘイリアジア青年作家プロジェクト　ヘイリ芸術村／韓国
　　Art Court Frontier 2007 #5　アートコートギャラリー／大阪（北区天満橋）にて6月29日～7月14日迄開催

KITAMI Hiroko

喜多見ひろ子

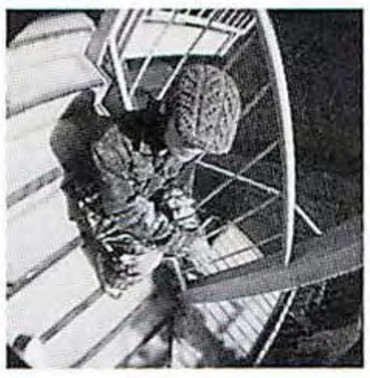
表現したい〝こと〟があります。
表現の方法は無数にあります。
今は一つ一つの方法を試し、形にしている
ところです。



A's フレンズ 2
パネル、綿布、アクリル、油彩
180.0 × 180.0 ㎝
2006 年
photo by　戸島大輔



A's フレンズ 3
パネル、綿布、アクリル、油彩
180.0 × 180.0 ㎝
2006 年
photo by　戸島大輔



喜多見ひろ子

1983 年　東京都生まれ
2006 年　阿佐ヶ谷美術専門学校絵画表現科卒業
2007 年　阿佐ヶ谷美術専門学校研究科卒業
　　京都造形芸術大学通信教育部美術科洋画コース卒業
　　多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻油画研究領域在学中

個展
2005 年　Gallery LÉ DECO 3 ／東京
2006 年　Space kobo & tomo ／東京

グループ展他
2004 年　Bartok Gallery ／東京
2005 年　Art in Sympathy vol.1　　人形町 VISION'S ／東京
2006 年　Thought + Refraction　　人形町 VISION'S ／東京
　　Art in Sympathy vol.2　　人形町 VISION'S ／東京
2007 年　doors　　文房堂ギャラリー／東京
　　日英共同制作作品展　EVOLUTION　　The Burt gallery／London〔U.K.〕

SAMEJIMA Daisuke

鮫島大輔

終わりのない独り言

ほぼ毎日作品作りをしている。

まったくこつこつタイプではないので、気分が乗らない日はすぐ作業を止めてしまうし、乗っている時は一日の区切りを無視して作業を続けてしまうので生活リズムをすぐに崩してしまう。

そうすると他人と話す時間は極端に減って、気がつくと一日に発した言葉がコンビニで買い物をする時と独り言を言う時だけだったりして、このままだと人前で話すことが苦手になるんじゃないだろうかと一人で不安になる。

ただ、そのぶんというわけじゃないが作品作りをしている時間は気が付くとどうでもいいことを含めて頭の中で常に自分と話をしている。

でもそれは目の前にある作品についての、画面をもっと明るくしようとか、絵に奥行きを出さなきゃとかそういう類のことではなく、その時の作業自体とは何の関係も無いことが多い。つまり黙って作業をしていて、わざわざ一度に二つのことを誰に見せかけるでもなく密かにこなしているのである。そんな時よく思うことが、今まさに生み出そうとしているこれは何だろうということ。現実世界では今作っているこれは何にも使えないわけで、実用という意味で、作っていて世の中に役立っているという自信は微塵も湧いてこない。しかもアトリエには見渡す限りそれが積み上げられている。

そう考え出すとこれが自分にとって何なのかという回答が欲しくなる。

ある日積まれた作品群を見渡していると、作品と作品の隙間に作りかけで放置されてほこりを被っているプラモデルの箱を見つけた。

その時ふと自分にとっての作品は、いつまでたってもきっとこのプラモデルのようなものなんだなと思った。プラモデルは、誰かが作ったモデルをばらばらに分解したものをもう一度組みなおすという、誰が作っても同じ形になるものである。一から自分のコンセプトをもとに、この世に二つとないものを作り出すこととはだいぶん隔たりがある。それでも一連の流れにおいては似ている部分も多い。

プラモデルをこつこつ作る行為は、最終的

に完成品を誰に見せるための行為なんだろうか？継ぎ目を消してやすりをかけて、塗装する。できるだけ本物に近づけるように神経を使って作業を進めていく。やっと完成した時にそこにあるのは自己満足の塊である。

よく作品作りにおいてそれは見せるために作っているのか、自分のために作っているのかという議論が行われる。

自分においてはその答えは後者だろう。自分のために作品を作っている。

プラモデルはこれを作ろうとプラモデルを購入し、箱を開けたときが一番興奮する瞬間である。頭の中で完成を想像して完成までの手順を考えているときが楽しく、完成したころには情熱は冷め、次のプラモデルへと気持ちは移っている。

作品作りも、アイディアを形に持っていくまでが一番楽しい。

つまりは自分にとって作品とは何にも使えない、その存在そのものが価値である自己満足が結集したものである。故に異常なほど凝ることもできるし、完成までの労力を惜しまないのだと思う。

そういうことを考えていたら作品が仕上がっていた、なんて都合がいいことはやっぱりおきない。

FLAT BALL 2006 No. 1 ～No. 15（展示風景）
アクリル樹脂、アクリル
各17.0×17.0×17.0 cm
2006年







Round Mushroom（展示風景）
FRP、アクリル
130.0 × 100.0 × 100.0 cm
2006 年

鮫島大輔

1979 年　兵庫県生まれ
2005 年　多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了

個展

2002 年　LANDSCAPELAND　radio:on ／東京
Free ART Free 2002 FAF AWARD SOLO EXHIBITION　SKYDOOR ／東京
トーキョーワンダーウォール都庁 2002　東京都庁舎／東京
2003 年　Walk in cube　トーキョーワンダーサイト／東京
2005 年　beautiful world　petal fugal ／東京
2006 年　Everyday Journey　～次元を超えたランドスケープペインティングへ～　equal ／大阪

グループ展他

2000 年　SIMULATOR　模擬訓練装置　多摩美術大学／東京（'01、'02、'04）
2001 年　SIMULATOR-EXTRA in NO?OCK　新宿ロフト／東京
Pepper's Project Exhibition Landscape Ⅲ　風景の中へ　Pepper's Gallery ／東京
FREE ART FREE Exhibition ～ Artlympic 2001　SKYDOOR ／東京（'02、'04）
eyesaw 11th multi-media exhibition　Gallery LÉ DECO ／東京
2002 年　第 19 回グラフィックアート「ひとつぼ展」　Guardian Garden ／東京
フィリップモリス KK アートアワード 2002「THE FIRST MOVE」　東京国際フォーラム／東京
トーキョーワンダーウォール 2002　東京都現代美術館／東京
2003 年　3 STEPS Exhibition　SKYDOOR ／東京
東京五美術大学連合卒業制作展　東京都美術館／東京（'05）
ONGOING　A.B.cafe ／東京（'04、'05、'06）
Cow Parade 東京 IN 丸の内 2003　丸ビル周辺パブリックスペース／東京
230 人のクリエーターによる MINI MINI MOTOR SHOW　Guardian Garden ／東京
トーキョーワンダーウォール入選作家展　新宿プロムナードギャラリー／東京
2004 年　ARTIST NIGHT 3　トーキョーワンダーサイト／東京
emerging artist グループ展　トーキョーワンダーサイト／東京
Emerging artists from Tokyo wonder site　トーキョーワンダーサイトの作家たち展　トーキョーワンダーサイト／東京
前橋アートコンペライブ 2004　公開展示　ミニギャラリー千代田／群馬
景展　～シカクノイロハ～　相模原市民ギャラリー／神奈川
13 + 1　Galerie Le Port ／兵庫
トーキョーワンダーウォールの作家たち 2000 ～ 2003　東京都現代美術館／東京
ストリートペインティング　六本木トンネル　六本木トンネル歩道壁面／東京
TOKYO DESIGNER'S WEEK 2004 コンテナ展　お台場／東京
2005 年　270 人のクリエーターによるオリジナルジーンズ展「JEANS SHOP GINZA」　Guardian Garden ／東京
WONDER SEEDS +　トーキョーワンダーサイト／東京
国立国 2005　くにたち市民芸術小ホール／東京
2006 年　第 9 回岡本太郎記念現代芸術大賞（TARO 賞）展　川崎市岡本太郎美術館／神奈川
Bunkamura Art Show 2006　Bunkamura Gallery ／東京
2007 年　黒川紀章キーワードライヴ　国立新美術館／東京

http://www.geocities.jp/samehadakeikaku/

SUGAI Kazuho

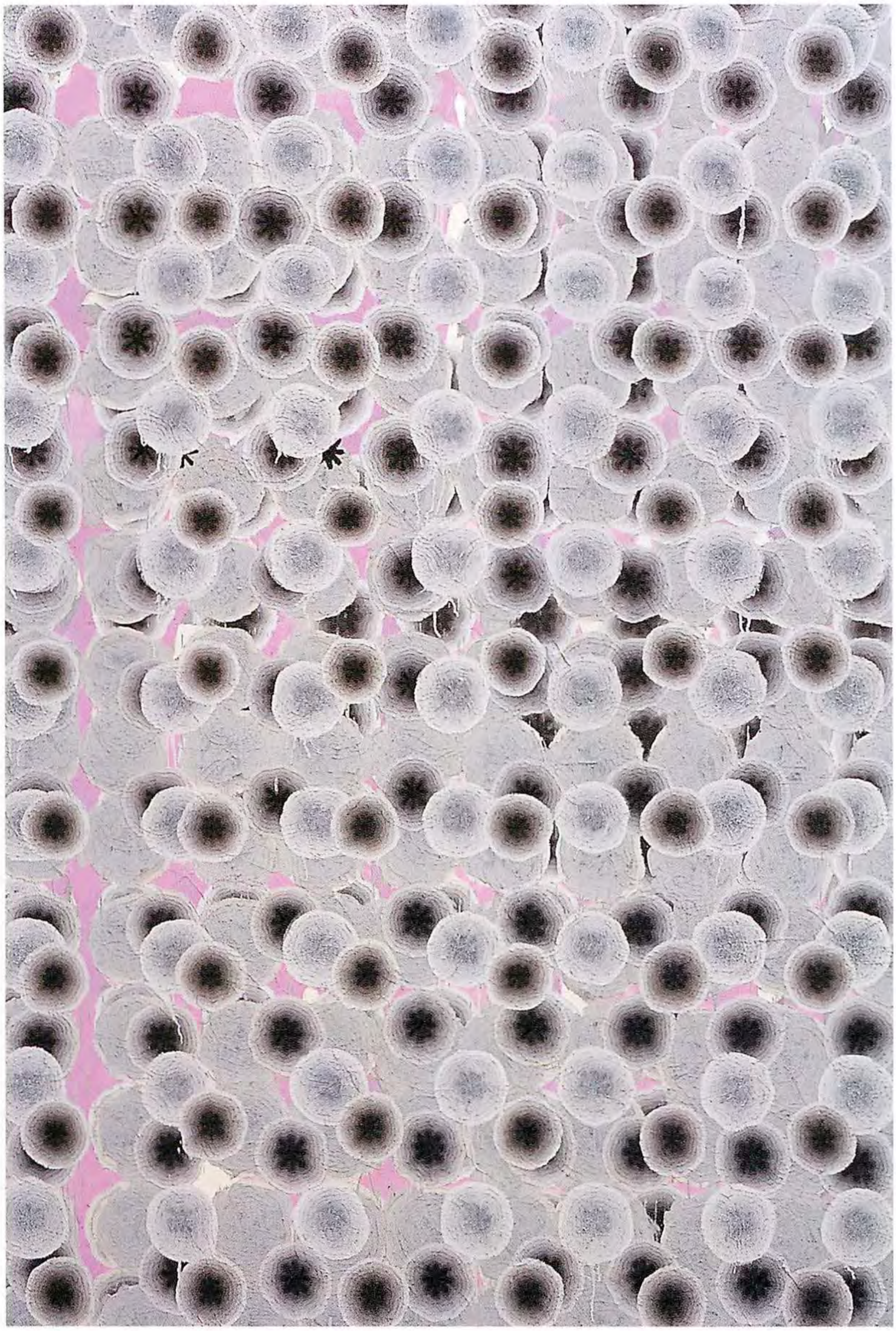
須貝一穂

毎日の所作

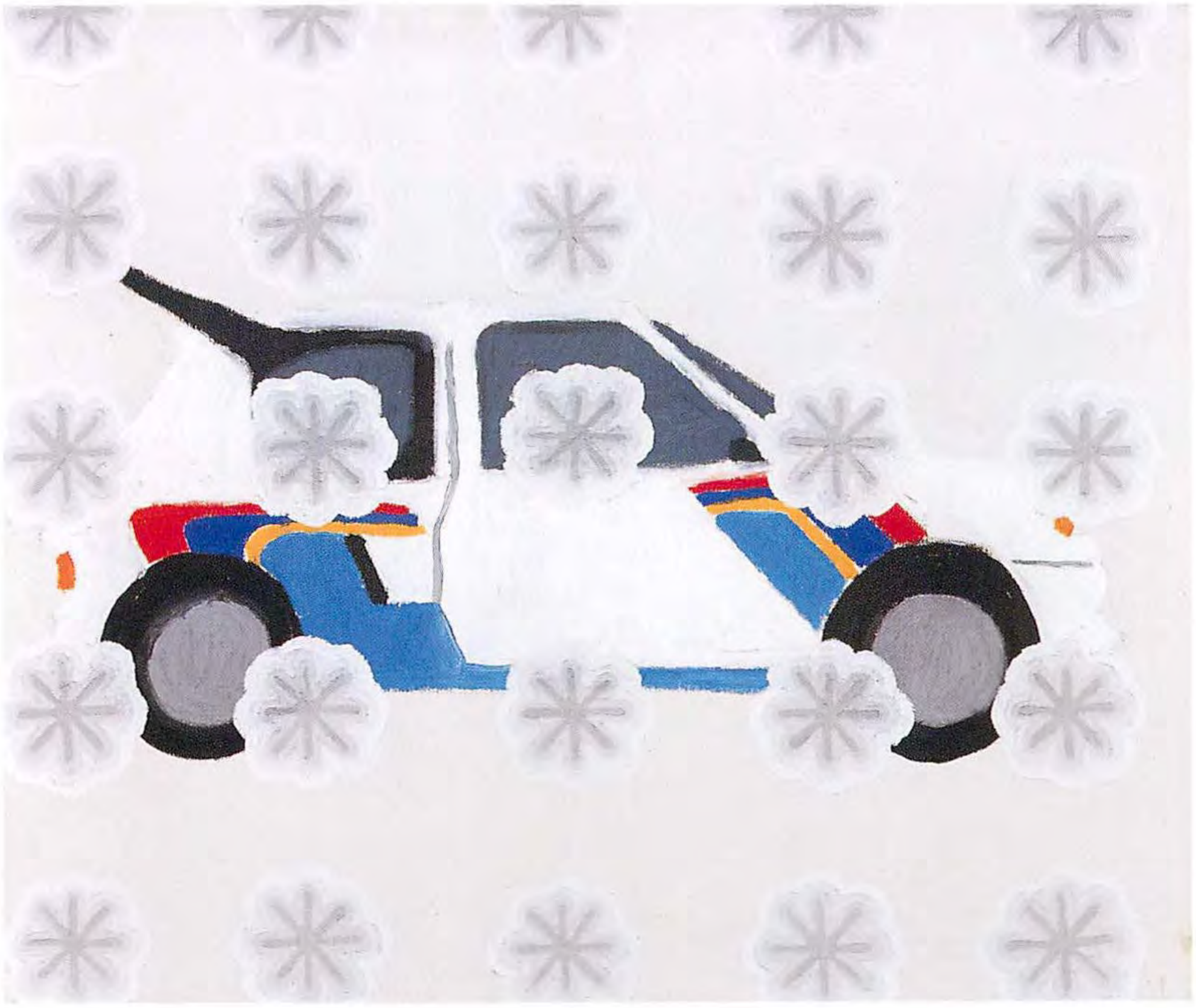
朝、目が覚めてまだ夢の中にいるような違和感や、よく目にする近所の風景から思いがけず懐かしい記憶が甦ったり、また初めて訪れた場所に以前来たことがあるような感覚を憶えたりすることは、特別な用意なしに毎日の中で起こることです。また、意識のもっとはっきりした毎日の中で些細な出来事でも時間がたつと、何度も再生したビデオテープのように、粗くはっきりしない白昼夢のような思い出へと移ろっていくように思います。

everydayと名付けた一連の作品は、移ろうたまゆらのような毎日と等価なテンションを保つための方法です。私にとって重要なことはたまゆらのような毎日と私との距離を測ることです。日々の所作として、マークを描いています。マークを繰り返し描き、また上から加筆したりしていますが、それは無味乾燥な作業であったり、ドラマチックで感情的なものでもありません。またマークを施すと同時に何らかの図像も描いています。描かれる図像もまた単なる作業であったり、大きく感情が揺り動かされるものであってもなりません。マークを繰り返し何度も描くことによって、何か思い入れのようなものが生まれてきます。情緒を孕んだ風景や人物の図像は筆跡や区切られた枠を忘れることは出来ません。

支持体や絵の具の事物性も、何らかのイメージを想起するような形や図像も、極端にはなりすぎない、はっきりしない白昼夢のようなものであって欲しいと願います。



everyday-15
キャンバス、油彩
194.0 × 131.0cm
2006 年
photo by　柳場　大



peugeot 205 turbo
キャンバス、油彩
45.0 × 53.0 ㎝
2006 年
photo by　柳場　大



須貝一穂

1977 年　東京都生まれ
2005 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了
2007 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科博士[後期]課程造形芸術専攻在籍

個展
2001 年　exhibit LIVE[laiv]／東京
2004 年　GALLERY ES ／東京
2006 年　exhibit LIVE & Moris ／東京
2007 年　GALLERY EXPECTS vol.8　　フタバ画廊／東京

TAKUMA Akihito

詫摩昭人

逃走の線

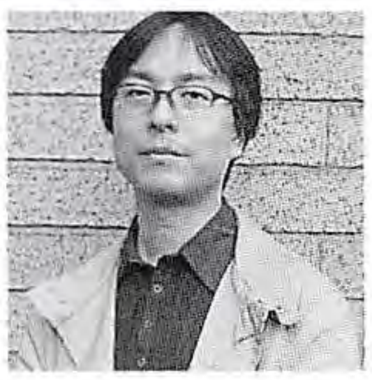
現在、取り組んでいる『逃走の線』というタイトルの作品は、一年間のヨーロッパ絵画留学の経験から、日本と西洋の土壌の違いに注目し、日本に合う油彩はないものだろうかということで、油絵の具の乾きやすさに注目、絵の具が乾く前にオリジナルの横幅2メートル以上の刷毛で上から一気に筆を走らせ、像を大きく乱すというものです。

絵の具が乾く前にすべての作業を終了しなければならないため、まず初めに制限時間があります。油絵の具は乾きにくいというものの、制限時間は長くても3日ほどで、いったん作業を始めると、2メートルの刷毛を振り下ろすまでは、少しの仮眠をとるくらいであまり休憩もできません。失敗も多く、筆を下ろした後、イメージが見えすぎていても良くなく、消えすぎていても嫌で、ぎりぎりのところで何とかバランスを保っているように仕上がればと思っています。

イメージは、あえてどこまでも地平線の続く遠近法の整った広大な風景や都市の風景を選んでいます。遠近法の整った風景は秩序を感じさせます。私はこの作品で秩序を守りながらもそこに留まることなく、生き生きとした前向きで自由なエネルギーが解き放たれた瞬間、秩序は大切だがそれだけに留まらないエネルギーを表現できればと願っています。



逃走の線（展示風景 - 中央）
綿布、油彩
150.0 ㎝× 380.0 ㎝
2006 年



詫摩昭人

1966年　熊本県生まれ
1993年　滋賀大学大学院教育学研究科美術教育修了
1993～1994年　シルクロ・デ・ベラス・アルテス〔マドリッド〕に在籍

個展
1992年　ギャラリー射手座／京都
1994年　ギャラリー射手座／京都
1995年　信濃橋画廊エプロン／大阪
1996年　信濃橋画廊／大阪
　　ギャラリー射手座／京都
1997年　信濃橋画廊／大阪
1998年　信濃橋画廊5／大阪
　　ギャラリー射手座／京都
1999年　信濃橋画廊5／大阪
2000年　信濃橋画廊／大阪
　　ギャラリー射手座／京都
2001年　ギャラリー射手座／京都
2002年　信濃橋画廊5／大阪
2004年　信濃橋画廊／大阪
2005年　信濃橋画廊5／大阪
2006年　信濃橋画廊／大阪
2007年　信濃橋画廊／大阪（西区）にて10月29日～11月3日迄開催予定

グループ展他
1991年　京都アンデパンダン　京都市美術館／京都
1992年　国際インパクトアートフェスティバル　京都市美術館／京都
1994年　九州美術の現況展　鹿児島市立美術館／鹿児島
1996年　九州美術の現況展　都城市立美術館／宮崎
1997年　自宅を用いての展覧会　草津市の自宅／滋賀
1998年　個のしごと　信濃橋画廊／大阪（'01）
1999年　びっくりアートフェスティバル　滋賀大学附属小学校／滋賀
2001年　種をまくプロジェクト参加／京都、滋賀（～'05）
2004年　日常性と非日常性　比良美術館／滋賀
2005年　震災復興10周年記念国際公募展　兵庫国際絵画コンペティション　兵庫県立美術館／兵庫
2006年　第4回池田満寿夫記念芸術賞　洋協アートホール／東京、大阪府立現代美術センター／大阪

http://www.biwa.ne.jp/%7Esanapi/taku.html



逃走の線
綿布、油彩
72.7㎝×91.0㎝
2006年

TSUKAMOTO Tomoya

塚本智也

うつろいゆくもの

私は絵画で出来るだまし絵的な要素を用いて制作している。地と図が反転することが面白く感じており、見えそうで見えないものを遊びの感覚をもって取り上げてきた。そのような効果によって描いている私の絵画を第3者が見て、何が描かれているのかを認識する行為そのものに興味をもつ。見ているつもりでも本当は見えていないということが私の生活の中でも実感することがあり、そのような体験を私の作品を通してしてもらえれば、と思う。

絵画は平らで奥行きのない単なる平面でしかない。しかし見る人に無限の空間や幻想を与えることができるし、描かれているものから、同じ形でも人によって違う形にみえたり、それぞれに異なるものを見ることができる。人が絵を見て解釈するということ自体とても複雑なことである。それらのことから私は絵画という表現を選択している。

実際の制作過程では、描かれるモチーフは明確な形を与えずにちょっとした手がかりを残して描かれているものを隠していく。描かれるモチーフが見えやすくなりすぎると簡単に理解できてしまうので、それを回避するためになるべく描かれているものが判別できないように形を不明瞭にし、分かりにくくする作業の繰り返しによって制作を進めていく。実際に何かが見えるように描くことにだけに限らず、見えないように描いたり、かすかに見えてくるように描くなどさまざまな可能性を想定していく。また、絵に出てくる人物は影絵のような描き方をしている。それは特定の人物を指定しないことにより、観者それぞれが空白の部分を埋めることができるように『誰でもない』要素を含めている。その人物は私自身の自画像や観者の記憶する誰かであるかもしれない。

モチーフは、制作の初期の頃に光と影の現象を基にして描くことから初め、現在では一見ＣＧに見えるイメージを、コンピュータでの作業を用いずに頭の中で組み立て、手描きで制作するというアプローチをとっている。実際にはない風景を、自然の現象を参考にしながら思考と記憶を頼りに目に見える形にしていく。初期から現在までモチーフや描き方は変わっているの

で、一見ばらばらなように見えるかもしれない。しかし光と影の考察を軸として、うつろい消えゆくものの存在を絵画に留めることは共通しており、私のテーマである。

素材は主にキャンバスに油絵の具で描いている。油絵の具は画面の色を塗りつぶして消すことはできる。けれど隠された絵の具は、物質の厚みとして、または痕跡として残っていく。描いては消されていくかたち達が、現れては消えてゆく影の現象と重なる。消えてゆく、変化してゆくことへの切なさや寂しい気持ちを、絵の具に置き換えて描く。描いたり消したりする行為にともない、画面の空間が揺れ動く。それは心の変化でもある。そして、最後に残ったものを鮮やかに留める。絵に描かれることでしか生まれることのなかった色や形は、永遠に絵画の中で生きつづける。これからも『描く』という行為を大切にして、絵画に取り組んでいきたい。



眠り
キャンバス、油彩
181.8 × 227.0 cm
2007 年

夜風
キャンバス、油彩
227.0 × 145.0 ㎝
2006 年





塚本智也

1982 年　石川県生まれ
2007 年　東京藝術大学修士課程絵画専攻修了

個展
2004 年　はるひ美術館／愛知
2005 年　ギャラリー芽楽／愛知
2006 年　ギャラリー芽楽／愛知
2007 年　Gallery Countach ／東京

グループ展他
2004 年　ever green　愛知県立芸術大学／愛知
　　シェル美術賞展 2004　代官山ヒルサイドフォーラム／東京（'05）
2005 年　「表層の内側」日韓交流展　東京藝術大学／東京（'06、'07）
2006 年　窓からの眺め　カッシーナ・イクスシー／東京
2007 年　韓国青年ビエンナーレ　テグ市／韓国

HASHIMOTO Yuichi

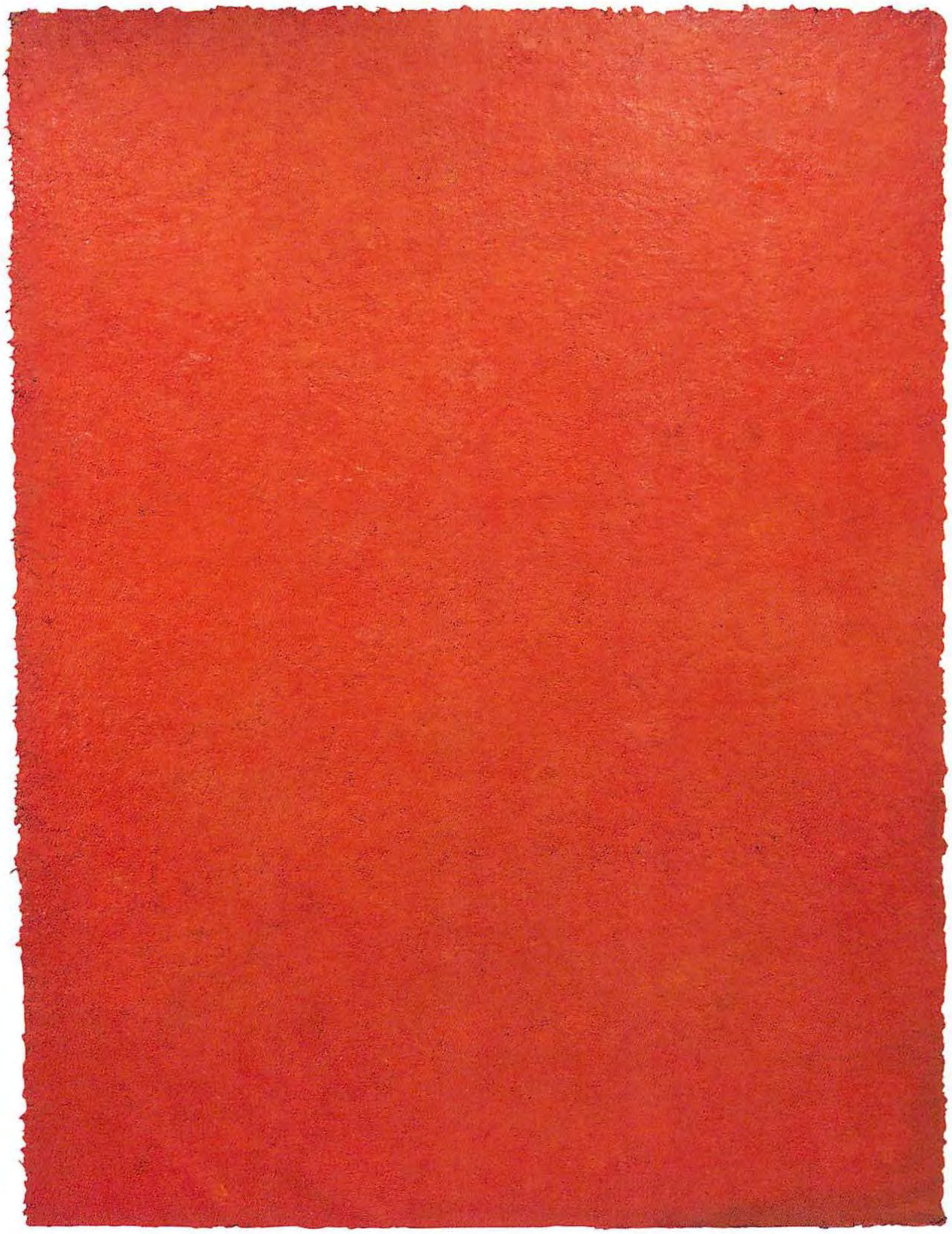
橋本祐一

描くことについて

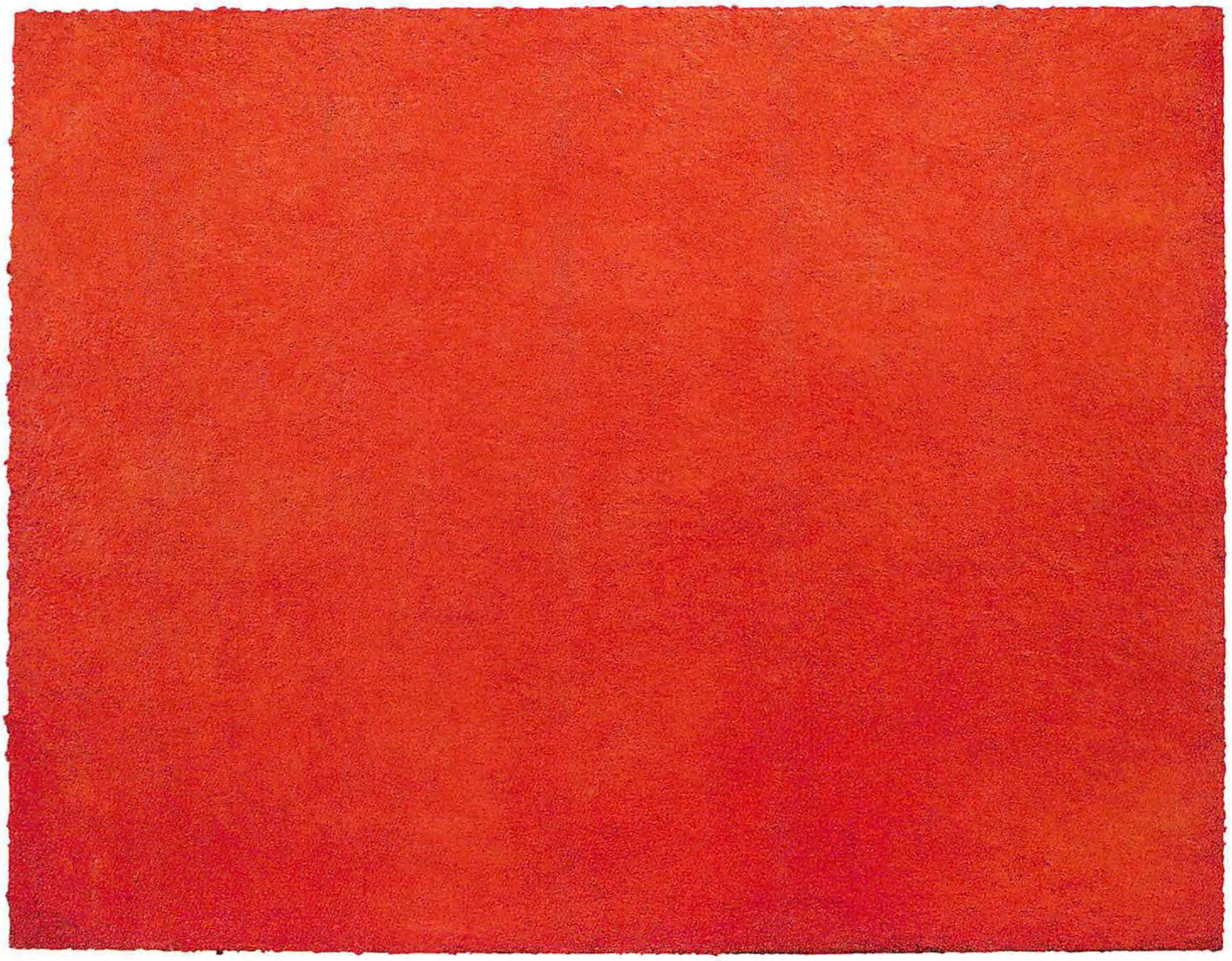
私にとって制作とは、方法も答えもわからず、自分の知っている知識も何の役に立たず、一人知らない場所に放り出されてよたよたと歩いているようなものである。だからどんな理論武装も役に立たず、すぐに迷ってしまう。言葉も通じないし進む方法もわからない、過去の経験も役に立たない。そんな場に立たされると、当然「自分は自分なのか？」みたいな自分の存在証明の希薄さを感じる。自分が小さいものになると、「なるようにしかならない」と一種開き直らざるを得ない。すると不思議なもので、出会うものみんなに感謝するようになる。人に限らず、空でも、絵の具さえも。生かされていることを身にしみて感じ、強い自我もようなものが無くなっていくのがわかる。出会いの大切さ。とても不安ではあるが、同時にとても気持ちがいい。自分の知っている地点を越えたそんな感覚のときに、作品が作れたりする。勿論、苦しんで苦しんで、の時も在るが、そんな時は大抵、自分が鷹揚になっていたり、自我が強すぎて傲慢になっていたりする。「わからない、でも歩くしかない。迷いそうだな、でも進みたいな、生きていたいな。」と心から思い続けるとおのずと行為は決定され、その願いは叶うものである。

何かを描こうとすると意味を消そうと絵の具が勝る。外界の対象がキャンバスの中ではリアリティーを持たない。塗られる、付けられるといった絵の具の痕跡とキャンバスの隙間や、すでにそこにあるものとしての質感の方がリアリティーを持つ。だから何かを描くことはやめる。絵画は、そこに描かれるというよりもそこに自然に顕れる。ただ、微弱で、すぐになくなりそうな時もある。全てはキャンバスと絵の具と空間でやっていることで、塗り方や厚みは全く関係ない。ただ困ったことに、絵の具の中に入ってしまうと、それは絵画ではなく絵の具になる。

やっていることはただの繰り返しである。しっかりと絵の具を付けることは大切なことである。きちんと付き合っていれば、自然と顕れる。



絵画（未完）
キャンバス、油彩
230.0 × 180.0 cm
2006 ～ 2007 年



絵画（未完）
キャンバス、油彩
170.0 × 200.0 cm
2005 ～ 2007 年



橋本祐一

1973 年　東京都生まれ
1997 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科絵画専攻油絵コース修了

個展

1999 年　アトリエホソダ／埼玉
2002 年　コバヤシ画廊／東京
2003 年　コバヤシ画廊／東京
2004 年　コバヤシ画廊／東京
2005 年　exhibit LIVE & Moris ／東京
2007 年　村松画廊／東京（京橋）にて 7 月 9 日～ 14 日迄開催予定

グループ展他

2008 年　橋本祐一・吉澤愛美展　　世田谷美術館区民ギャラリー／東京（世田谷）にて 3 月 4 日～ 9 日迄開催予定

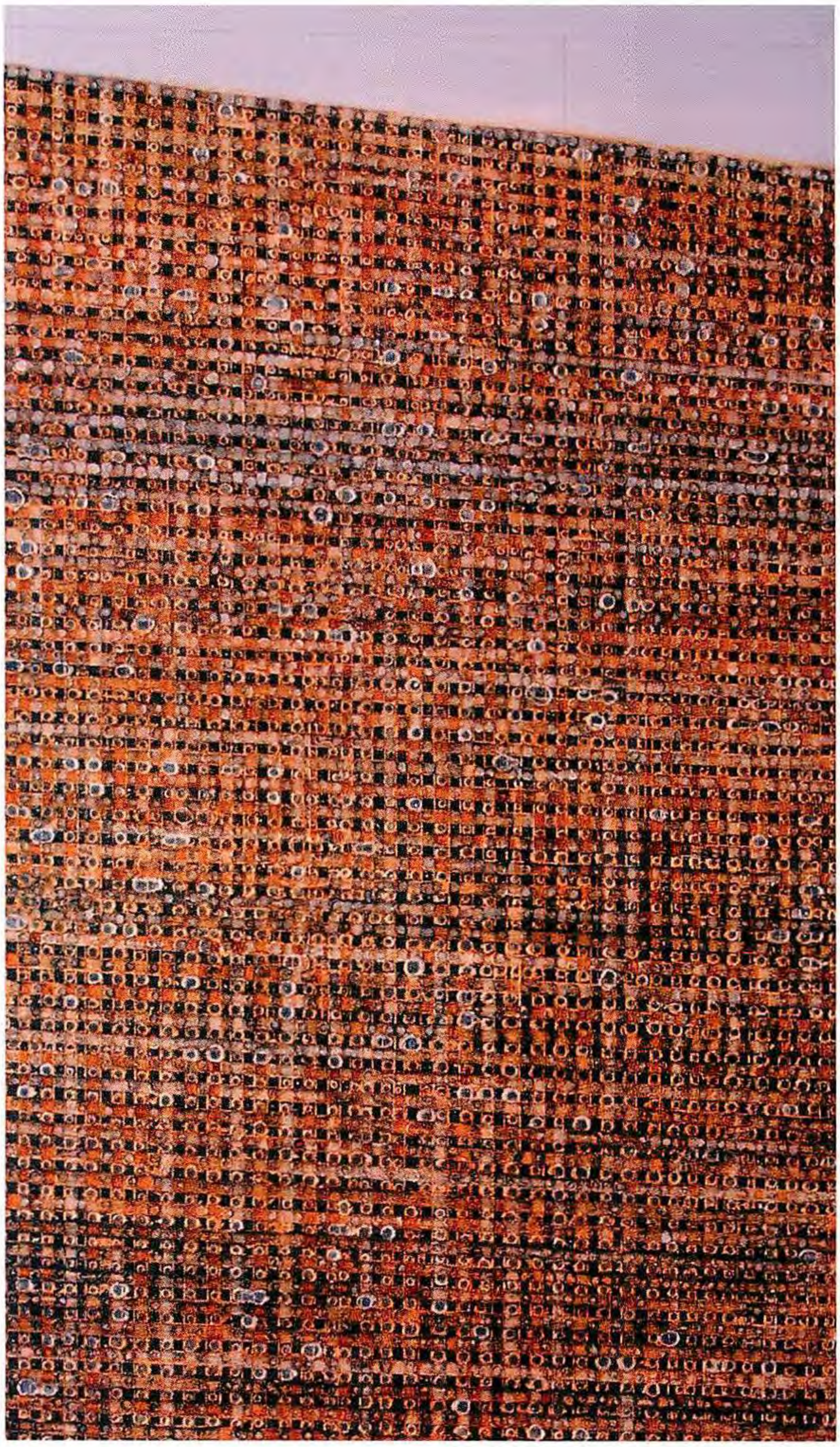
HAYAKAWA Katsumi

早川克己

あなやすきま

絵画空間に関する垂直・水平という二元論。それに対して、斜め、隙間、穴、奥行き、裏、流れ、浮遊、明滅、巨視的、微視的、重ね合わせ、という言葉が想起する絵画空間の多重性とホロニックな構造。この相対的な発想を機軸に、絵画の更なる可能性の探求と新たなビジュアル言語の創出を試みたいと考えています。

そして、これだけ多様なメディアが存在する現在、そもそも絵を描くとはいったいどういうことなのか、という根本的な問いかけを常にしていきたい。その思考過程を通じて、絵画制作に対する強固なモチベーションの獲得と継続を図ると共に、現在、自分をとりまく(或いは規定する)政治的・社会的状況についての大きな構造というものに対しても、自覚的であり続けたいと思う。こんなことを考えながら日々、右往左往しています。



Unit Element
キャンバス、アクリル、油彩
183.0 × 107.0 ㎝
2007 年



Unit Element の部分



早川克己

1970 年　栃木県生まれ
1992 年　日本大学芸術学部美術学科版画専攻卒業
1998 年　School of Visual Arts New York 修士課程修了

個展

1999 年　Daniel Silverstein Gallery ／ New York〔U.S.A〕
2000 年　Daniel Silverstein Gallery ／ New York〔U.S.A〕
　　McClain Gallery ／ Houston〔U.S.A〕
2004 年　McClain Gallery ／ Houston〔U.S.A〕
2006 年　M% Gallery ／ Cleveland〔U.S.A〕
2007 年　McClain Gallery ／ Houston〔U.S.A〕にて 11 月開催予定

グループ展他

1990 年　期待の新人作家展　りゅう画廊／東京
1990 年　大学版画展　町田市立国際版画美術館／東京
1996 年　Visual Arts Gallery ／ New York〔U.S.A〕
　　West Side Gallery ／ New York〔U.S.A〕
1997 年　INTERNATIONAL ENCAUSTIC WORK '97　Gallery R&F ／ New York〔U.S.A〕
　　ALL LEAD TO ROAM　Visual Arts Gallery ／ New York〔U.S.A〕
　　Plaza Gallery at Fordham University ／ New York〔U.S.A〕
　　PRINT WORK '97　Barret House Gallery ／ New York〔U.S.A〕
　　West Side Gallery at School of Visual Arts ／ New York〔U.S.A〕
1998 年　NEW MODELS,ENVISIONING THE REAL IN ABSTRACTION　McClain Gallery／Houston〔U.S.A〕
　　COMTEMPORARY WAX　Stephen Haller Gallery ／ New York〔U.S.A〕
2001 年　IN THE ABSTRACT　McClain Gallery ／ Houston〔U.S.A〕
2003 年　SPIRITUAL HUNGER　Daniel Silverstein Gallery ／ New York〔U.S.A〕
　　MORE M% Gallery ／ Cleveland〔U.S.A〕
2004 年　S V A　ASAHI ART GALLERY ／東京
2006 年　WONDER SEEDS 2006　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
　　ART(212) Contemporary Art Fair　The 69th　Regiment Armory ／ New York〔U.S.A〕
2007 年　The 12th Annual Los Angeles Art Show ／ Los Angeles〔U.S.A〕
　　Summer Group Show　Winston Wachter Fine Art ／ Seattle〔U.S.A〕にて 7 月開催予定

http://www.katsumihayakawa.com



Microsphere
キャンバス、アクリル、油彩
127.0 × 127.0cm
2007 年

HIROE Tomokazu

廣江友和

日本人の自分と美術

美術とは本来人に見てもらうのが前提であり、それを通して何かを感じてもらうものであり、エンターテイメントだと思っている。日本国民の持っている美術のイメージは与えられる情報が偏っている為、作品自体をあまりにも見ていなさすぎる。有名な昔の作家の展覧会には、多くの人が見に行くが無名の若手作家の展示には行くはずもない。もっと、色々な作品があることを知ってもらいたいし、気楽に同じ時代を生きている作家の作品を見てもらいたいと思う。そんな日本人が持っている美術に対する固定観念を少しでも変える作品をつくっていきたい。

自分としては表現の質にこだわっているが、スタイルやメディアにものすごく執着している訳ではないので表現しやすい理由から絵画を使って表現している。自分なりのやり方として作品を考えるにあたって一番重要なのがイメージとしてのビジュアルである。そのビジュアルは様々なところからのイメージでもあり、自分が今まで体験したことや見てきた情報でもある。テーマも様々でその時々で異なってくる。そんな様々な情報が錯綜する中から、自分がリアルに感じるものをモチーフとしている。それは、自分自身の感情であったり、自分自身の体の一部であったり、身の回りのものであったり、社会に埋没するありきたりなイメージであったり、人間が持っている根源的な欲求であったり、生と死でもある。ビジュアルソース（雑誌、写真、ビデオ等）からイメージを膨らませ、ただビジュアルが過激であれば良いというような表現をするだけではなかなか作品にならない。直接的な表現よりも想像力を刺激する表現のほうが、エンターテイメント性が強いように思う。絵画空間とその作品のコンセプトがうまくかみ合うようなインパクトのあるそんなイメージをいかにビジュアルとして定着させるか追及していける。後は、その出てきたものに説得力をつけるかであり、作品としての完成度はもちろんのことながら作品の質についても考えなくてはならない。絵画を表現するうえで必要になってくる基本的な古典技法や材料も研究し、絵画としての質を追求してい

る。

作品を考えるにあたってどうしても絵画というメディアが頭からなかなか離れず表現の幅が狭まっているともいえる。それは、ビジュアルとコンセプトの比重によるところが大きい。ただ、重要なのはメディアではなくいかに作品がエンターテイメントとして人に伝わるかである。さらに、考える時に自分のアイデンティティである日本人としての考えをどうしても省くことが出来ない。だから、あえて日本人としてどのような表現をすればよいのか日々考えている。今の日本社会は様々な国の文化が入り混じり混沌とした社会でもある。そんな中から日本人の視点で表現を追及したい。

自分が今まで見てきた美術の環境の為なのか、絵の勉強を始めた時は何も疑問にも思わず、西洋の油彩画に憧れを抱きつつ勉強をしていた。だからと言って、東洋や日本の文化を詳しく理解しているわけでもなく何となく馴染み深いといった曖昧な理解力でもある。そんな、西洋人でもなく純粋な東洋人でもない曖昧な立場からしか表現できないものをビジュアルとして捉え表現している。コンセプトとして具体的に油彩画の技法を使い日本画的な感覚を、自分の持っているアイデンティティを活かした表現を追及していきたい。それは、今の曖昧な現代社会の影響によるところが大きい。



hung free
パネル、キャンバス、油彩
22.0 × 16.5 ㎝
2007 年



cupid
パネル、キャンバス、油彩
22.0 × 27.5 ㎝
2007 年



廣江友和

1976 年　東京都生まれ
2002 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業

個展
2003 年　ART BOX ギャラリー／東京
2006 年　ヴァニラ画廊／東京

グループ展他
2002 年　第 12 回 ART BOX 大賞展　　ディックカラースクエア／東京
2004 年　トーキョーワンダーサイト 0 号展　　トーキョーワンダーサイト／東京
　　東京コンペ　　丸ビル／東京
　　シェル美術賞展 2004　　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2005 年　トーキョーワンダーウォール公募 2005　　東京都現代美術館／東京
2006 年　ワンダーシード 2006　　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京

FUJIBE Yasuyo

藤部恭代

Prima material

私は80％の衝動と、20％の理性で作品を創りあげている

自分自身の内なる性と、それに関わる感情の変化を、常に楽しんでいるのである。

月の満ち欠けと呼応して、体内の水分率が変化することにより、その水分量の変化が、心身に影響を及ぼす。という説が実証されれば、表現媒体としての、私自身の不可視な感覚を、目視することができ、そこに新たな表現の可能性があるのではないか。

変化することを楽しむ私は、その表現においても同様のことが言える。技術や価値観として新しいことには常に興味があるし、それとは逆に、技術や方法論としては既出のものであっても、新鮮な表現として、提示することができれば、そこに可能性を感じる。

私の中で、最も重要なことは、目に見えるということ。視覚の問題である。私は、表現方法に関わらず、そこに永遠に変わらない時を求めている。このことが、平面というフェティッシュな世界に、こだわり続けている一つの答えだと思う。



chain reaction
麻布、油彩、ガラス（ラインストーン）
162.0 × 97.0 cm
2007 年

skin respriration
綿布、油彩
145.6 × 103.0 ㎝
2006 年





藤部恭代

1979 年　京都府生まれ
2004 年　京都造形芸術大学大学院修了

個展
2003 年　藤部恭代展　　同時代ギャラリー／京都

グループ展他
2003 年　京展 2003　　京都市美術館／京都（'03、'04）
　　混沌から躍り出る星たち 2003　　SPIRAL／東京
2004 年　Paintings4　　CUBIC GALLERY／大阪
　　神戸アートアニュアル 2004　トナリノマド　　神戸アートビレッジセンター／兵庫
2005 年　Xhibitions #01 ～絵が生まれてくるということ～　　miho katsuragi GALLERY／京都
　　ART FAIR　　ART ZONE／京都

MAKI Yukari

牧ゆかり

虹色眼鏡で仮装現実をみる

絵画表現を根本からくつがえし、アートの領域を広げたポロックの絵の具をたらす行為やトォンブリーの自動書記による作品、これらの持つ表現力とは何か?作意なのか無作意なのか?偶然なのか必然なのか?この問いは、子供の描く絵からも感じる問いである。

２００４年頃の作品は、シャーマンのようにまたは子供のように自由に手を動かすことに始まり、何かに描かされているかのように描いてゆき、自分の感覚やバランスによって作品を作っていました。作意と無作意、偶然と必然を行き来しながら絵を描くことで、素材や各色の持つ力の特徴や違いに気づいてゆきました。個々の色と対話をしてゆき、隣り合う色の相性に注意をはらうようになってゆき、虹色というキーワードが導き出されました。この頃は具体的なモチーフはなく、描く行為が終わりなく果てしなく続いてしまう恐れがつきまとっていたように感じます。ギャラリーＧＡＮでの展示を転機に偶然にゆだねるのではなく、自分で制御してゆくことを重視してゆくようになりました。以降はＶＯＧＵＥ誌などのスーパーモデルを主なモチーフとしています。モデル達は美しく飾り、洗練された肉体をブランドイメージに見合うように仕立てられ、ポーズをとっています。人間味や生活感などは、ブランドの持つ高貴な雰囲気により見えません。モデル達の無表情で冷たい視線がとても魅力的だと感じています。自分から離れ、別の何者かに成り変っている。すなわち、仮装しているモデル（人間）達を見ているのである。虹色のフィルターでモデル達の映し出された仮･装･現･実･を写し出してゆきたいのです。



face
台形キャンバス、アクリル
50.8 × 50.8 ㎝
2007 年



face
紙、インク、アクリル、色鉛筆
55.5 × 158.0 cm
2007 年



牧ゆかり

1976 年　愛知県生まれ
2004 年　東京藝術大学修士課程修了

個展
2005 年　スルガ台画廊／東京
　　ギャラリー GAN ／東京
　　画廊　編／大阪
2006 年　ギャラリー 58 ／東京
2007 年　ギャラリー IDF ／愛知

グループ展他
2003 年　New Wave Ⅳ　　ギャラリーくさ笛／愛知（'04）
2004 年　谷中日和 2004　　gallery J2 ／東京
2005 年　今枝大輔・牧ゆかり展　　アートウェーブギャラリーみずほ／愛知
2006 年　art in your room vol.5　　ギャラリー IDF ／愛知

MASUDA Kae

増田佳江

絵

私は小さな頃から、絵を描く時間を何よりも楽しんでいた。なぜ、こんなにも絵を描くことが好きなのかは分からないが、いつも、その時に欲しいものを描いてきたようだ。その対象は、大きなものから、小さなものまで様々だ。

例えば、街角でみる服の柄、旅先の風景、テレビでみる風景、本でみる動物や食べ物など、尽きることはない。それらは絵をつくり上げるための素材に過ぎないが、それらを手がかりにして、本当に見たいものへ近づこうとしている。

絵が描きたいから外を見るのか、外を見ていると絵を描きたくなるのか決められないが、絵を描く行為というのは、外から借りたイメージを絵にして返すことで、自分の感情なり、考えを清算しているようだ。それでも毎回きっちりと返すことはできず、いつまでも同じことを繰り返す。

空を見て感動するとき、同時にただ見ていることしかできないことがもどかしい。私にできることは、絵を描いて発散し、そして理解しようと努めることだ。

この先、私が一番欲しいものといえば、まだ見たことのない絵だ。いつも、目の前をなんとなく漂うが、つかみきれずにいる。ただ私はそれを目指して日々描くだけだ。



砂にかえす
キャンバス、油彩
53.0 × 45.5 ㎝
2006 年
photo by　怡土鉄夫

parachute
キャンバス、油彩
91.0 × 72.7 ㎝
2005 年





増田佳江

1978 年　京都府生まれ
2004 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻（油画）修了

個展
2004 年　mori yu gallery ／京都

グループ展他
2002 年　vector12　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
絶対的矛盾自己同一　mori yu gallery ／京都
snow white　同時代ギャラリー／京都
2004 年　黄色の庭弐　mori yu gallery ／京都
2005 年　Fluid Drive　同時代ギャラリー／京都
group show　ギャラリー小柳／東京
2007 年　Portrait Session　広島市現代美術館／広島

MUROI Kumiko

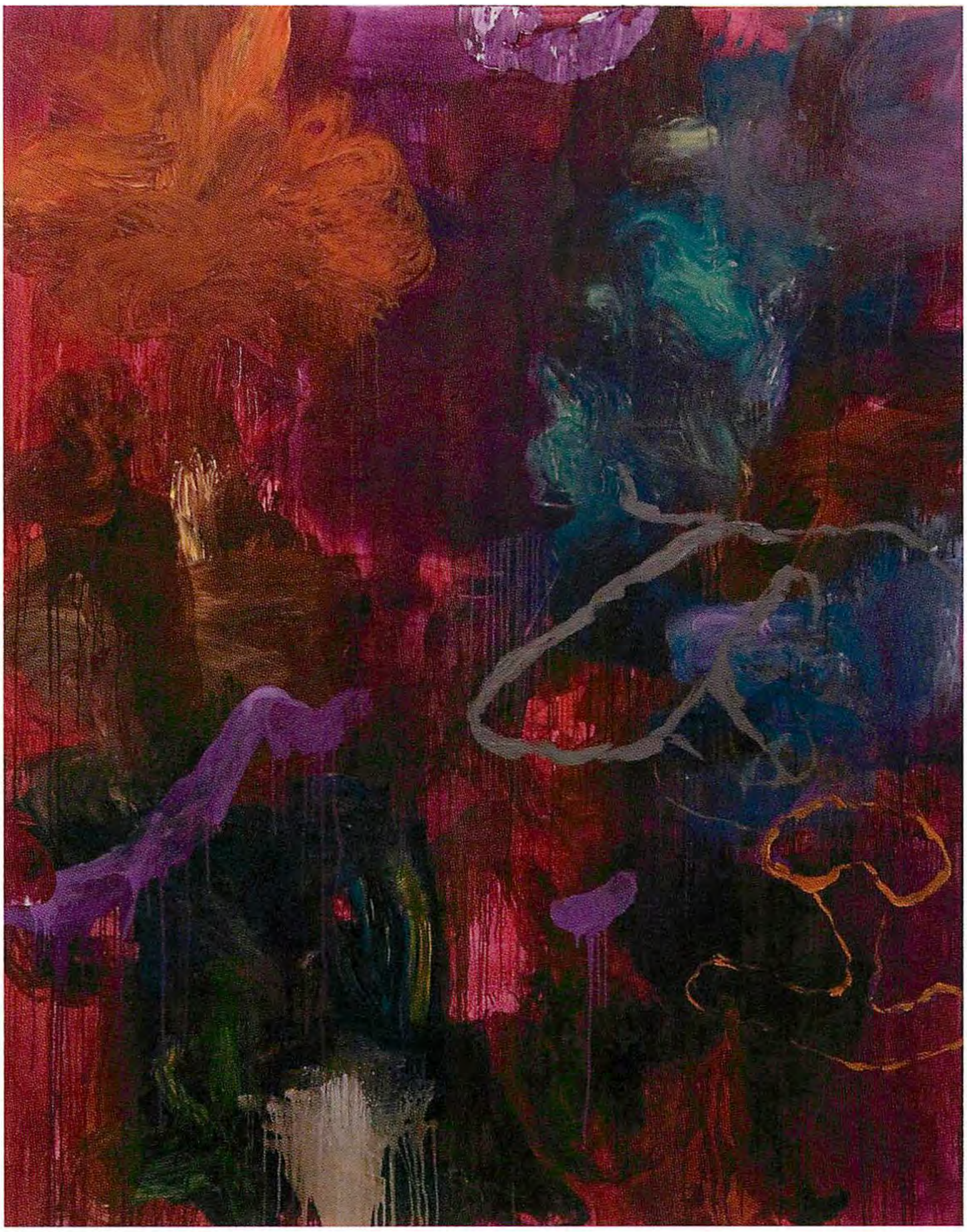
室井公美子

描くこと

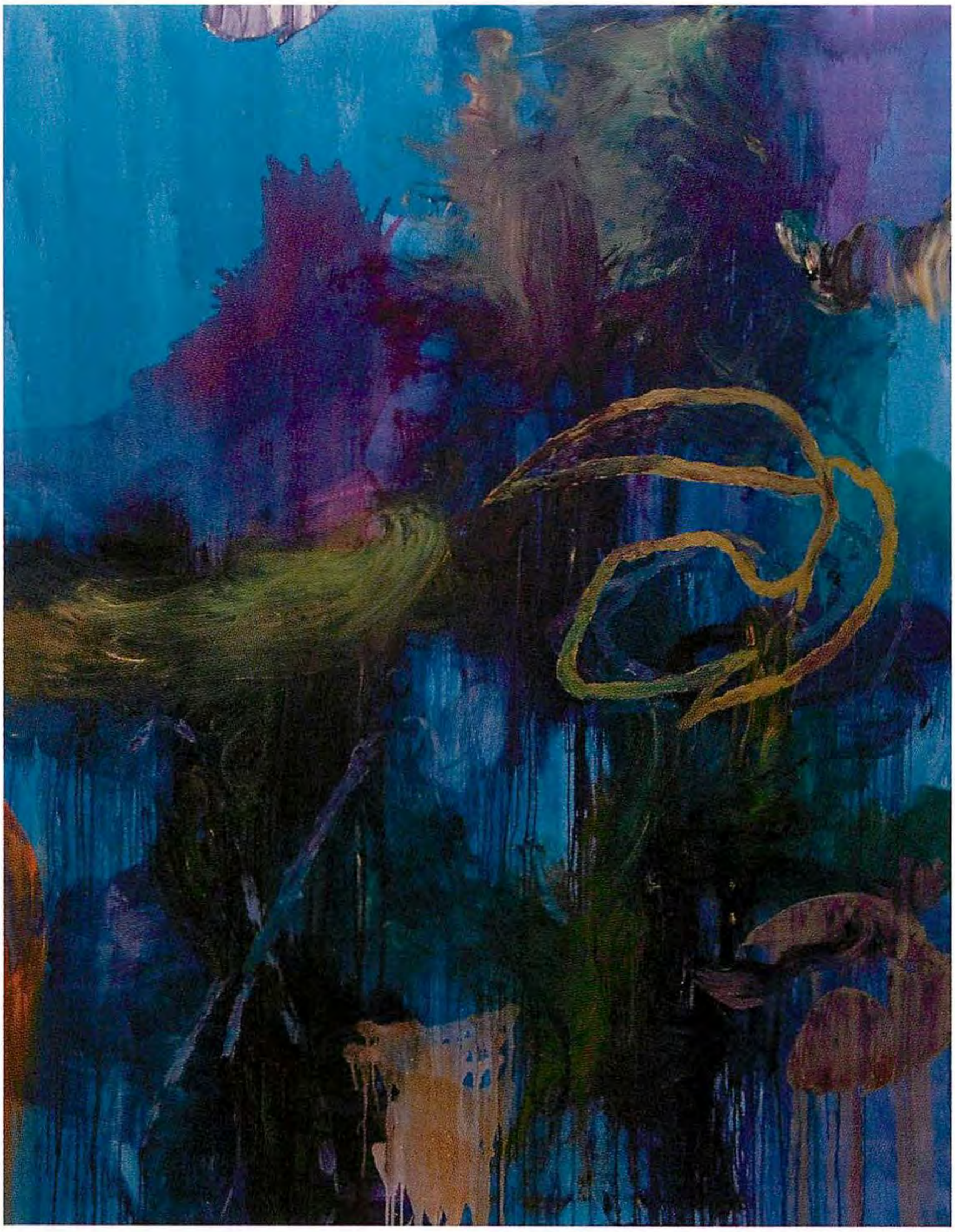
私は、私の記憶に残る曖昧な風景を絵画表面に現前させたいと思っています。

記憶に残る風景は、光の温かさであったり、風の臭いであったり、森の奥の暗がりを恐れる気持ちであったりと体が感じた、体が覚えている感覚そのものなのです。曖昧な風景は、目を閉じた奥に、頭の中にうすぼんやりと現れているもので、それに近づこうとすると、画面は一辺通りにはゆかず、壊したり、付け加えたり、手探りで、絵の中をさ迷い、旅するように作られてゆき、痕跡ともいえる画面として立ち現れてきます。同じ旅は出来ない、その瞬間瞬間が束ねられ、一つの存在として目の前に在ってくれたら。

私にとって、きっと絵を描くということは、私という存在が、記憶のみならず肉体的にもリアリティを持って現れてくる画面が見えるまで、ずっと繰り返し、繰り返され続ける行為なのだろうと感じています。



怪光
キャンバス、油彩
250.0 × 180.0 ㎝
2006 年
photo by　王丹戈



海寇
キャンバス、油彩
250.0 × 180.0 cm
2006 年
photo by　王丹戈



室井公美子

1975 年　栃木県生まれ
2007 年　東京造形大学美術学科絵画卒業

個展
2006 年　ギャラリー MOMO ／東京

グループ展
2005 年　群馬青年ビエンナーレ '05　　群馬県立近代美術館／群馬
2006 年　VOCA 展 2006　　上野の森美術館／東京

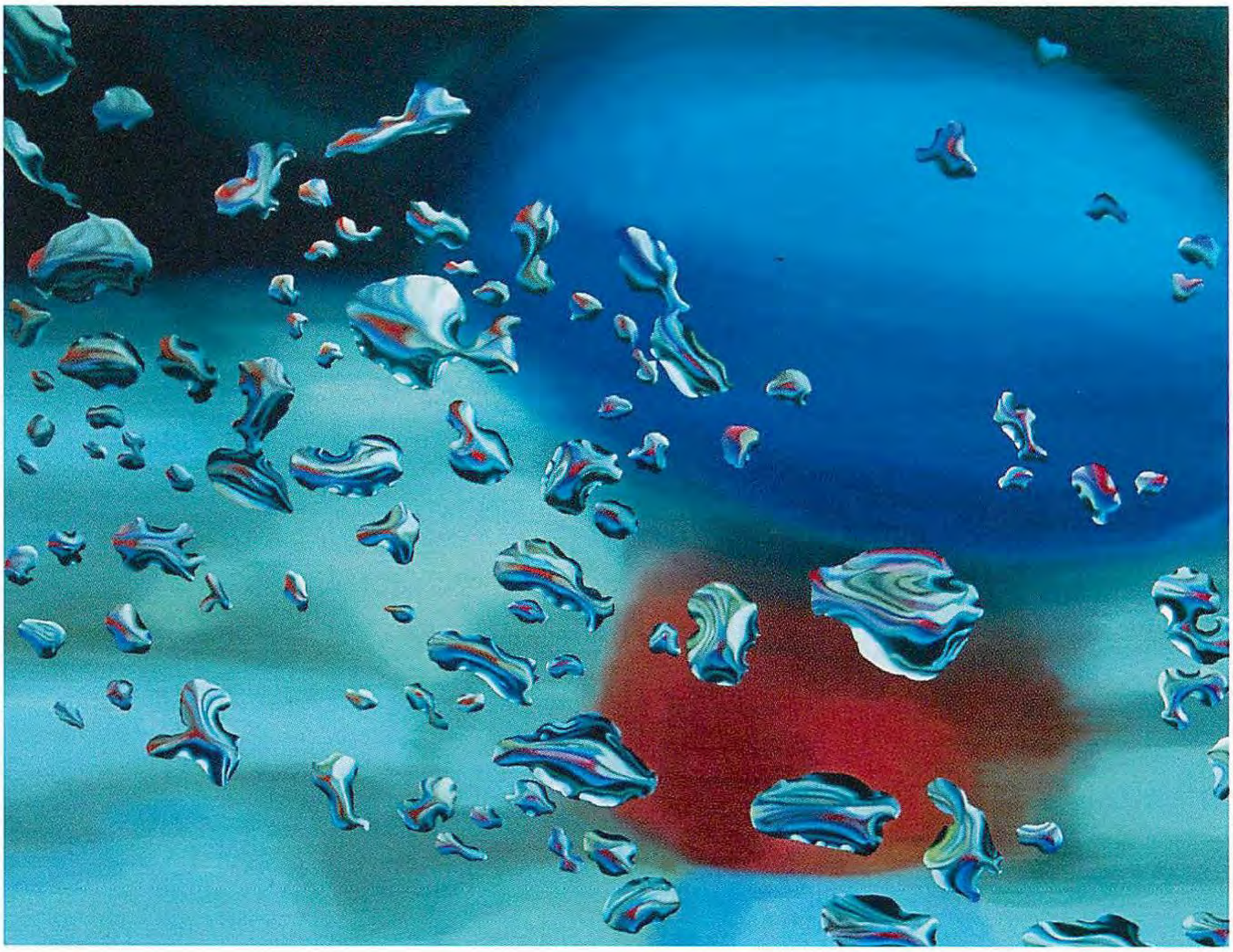
YABE Naoko

矢部奈桜子

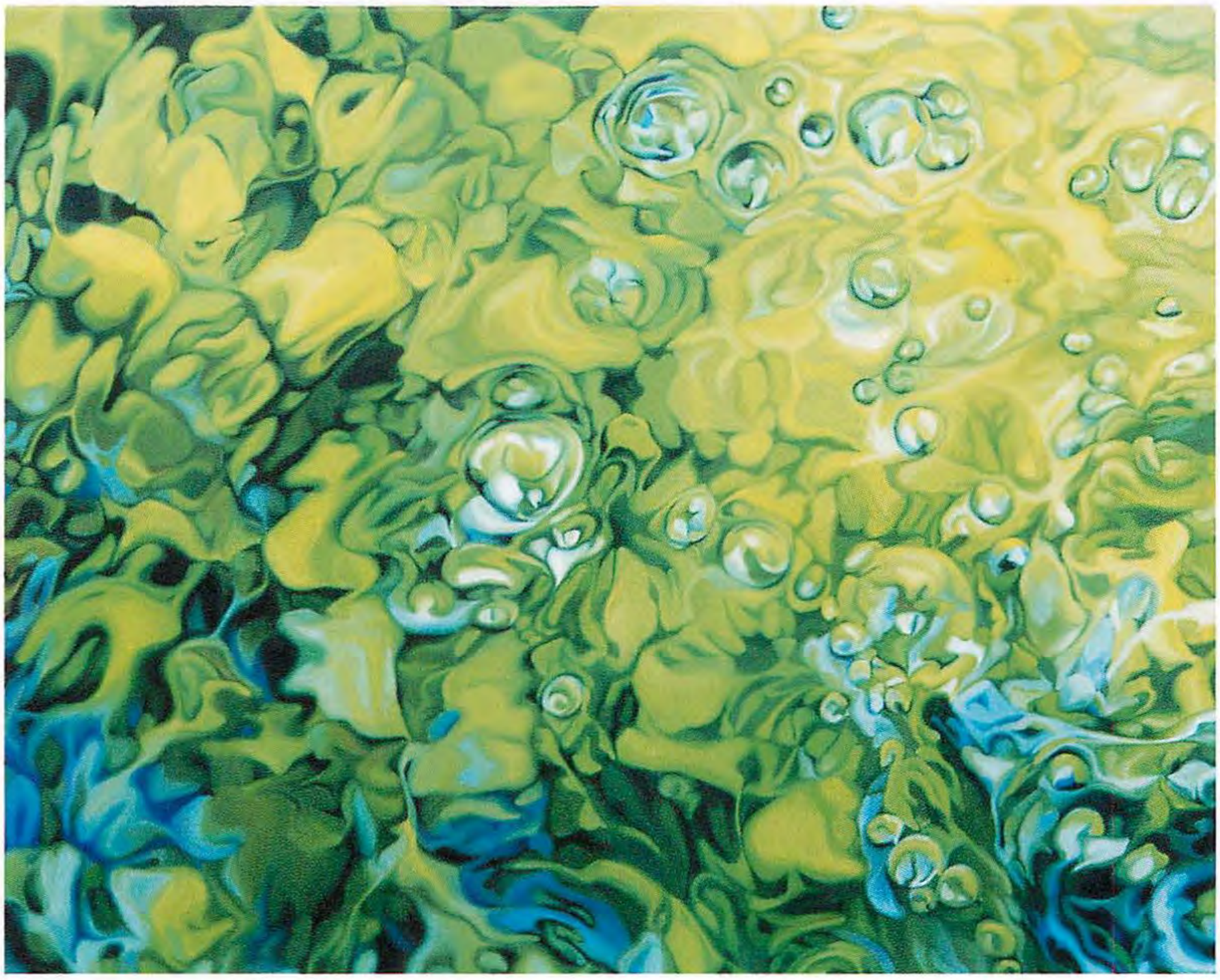
毎日の生活で錯綜していて、日常気がつかない〝有るもの〟の魅力に、ふと気づかされる、ということが作品のヒントになっている。

日常の中で景色や物などは常に人の心を動かしているわけではない。人の心を動かす時というのは、その人がそれらの存在にタイミングよく出会った時に現れる。木々や川、いつも見ている風景自体いつもと同じようにそこにあるけれど、人間自身の感覚が変化し、思考し始めた時にその物自体がいつもと違う像として現れる。そういった経験が私の作品に繋がっている。それらの経験から〝もの〟を違った視点でとらえ、作品にしている。いつも見過ごしているものが新鮮で初めて見たような感覚に陥る。それはいつも見ているようで見ていなかった、という証だ。

私はそういった〝もの〟を題材に絵におこす。特別な感覚が入り交ざって題材にしている〝もの〟の正体がぼやけるけれど、それが人の心を動かさせている正体かもしれない。



Fascination #1
キャンバス、油彩
45.5 × 53.0 ㎝
2006 年



Fascination #2
キャンバス、油彩
45.5 × 53.0 ㎝
2006 年



矢部奈桜子

1978 年　大阪府生まれ
2004 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程油画修了

個展
2002 年　ギャラリー千／大阪
2004 年　ギャラリーそわか／京都

グループ展他
2001 年　第 6 回昭和シェル石油現代美術賞展　目黒区美術館区民ギャラリー／東京
　　第 16 回群馬青年ビエンナーレ '01　群馬県立近代美術館／群馬
2002 年　entrancement 展　ギャラリーそわか／京都
2003 年　イメージの新様態、zoom & focus 展　ギャラリーすずき／京都
2004 年　FROM ／ TO　WAKO WORKS OF ART ／東京
　　神戸アートアニュアル2004　トナリノマド　神戸アートビレッジセンター／兵庫
2005 年　Japanese artist's recent works　WAKO WORKS OF ART ／東京
　　FLUID DRIVE　同時代ギャラリー／京都
2006 年　はなのいろや　ギャラリーゼロ／大阪

WATANABE Yutaka

渡辺　豊

カーテンコール。

主に舞台終了後に、出演者達が再度現れて、挨拶をする事。

舞台上が、最も華やかであり、混沌とする瞬間。

この時ばかりは、主役も脇役もほぼ関係なく、

本来の自分を表現する事を許される。

ただし、役柄の衣装を纏ったままで。

その彼らに対し観客は、賛辞や、時として罵声を投げかける。

演じた役に対し、彼らに対し。

私はこの、曖昧模糊とした状況を、絵画に置き換える。

ただ、ある舞台のカーテンコールを描くのではない。

これと同じ状況を、私が今まで得た、あらゆる情報・経験の中から、

再構築するのだ。

そのためにまずする事は、物語が終わったある舞台を、提示し直す事だが、

多くの舞台で見られる様な、劇的な空間を描く事はしない。

敢えて、日常にありふれた空間設定を、強く意識する。

室内　・　屋外　・　湖　・　空　等々

画面内の空間は、絵画史上で培われてきた、遠近法を使う事で創られる、

虚構のものである。

現実に存在する日常空間を、画布上に虚構であれ描く事で、



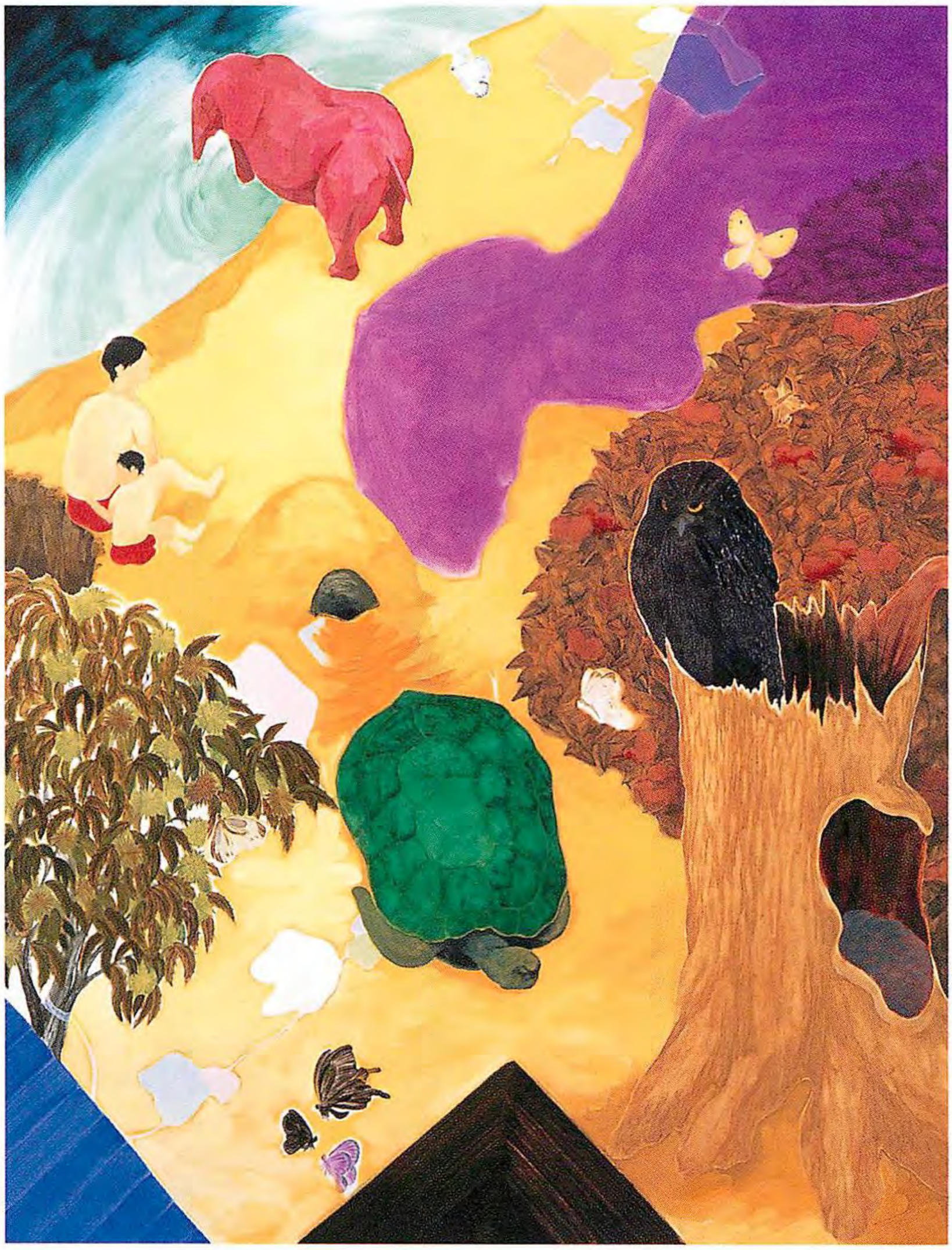
13 月
キャンバス、油彩
100.0 × 80.3 ㎝
2006 年
photo by 柳場　大

その上に現れる図像が、どんな姿・形であったとしても、
観客の現実と接続する、可能性が含まれてくるからだ。

人間　・　動物　・　家具　・　自然物　・　事象　等々

演劇と違う大きな点として、その空間に出てくる、
ほぼ並列な強度を持っている事が挙げられる。
なぜなら、演じてきた衣装を身に纏い、
個々に、又は幾つかにまとまりを示す一方で、
舞台中には出せなかった、各々の主義・主張を押し出してくるからだ。
この事が、図像の関係性を複雑化し、
私を含めた観客を、終わった物語の中に潜んでいた、
新たな物語へと誘う。

私の記憶の再構築が、観客の現実の再構築に繋がると、信じている。



25時
キャンバス、油彩
145.5×112.0㎝
2006年
photo by 柳場　大



渡辺　豊

1981年　東京都生まれ
2007年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展
2005年　GALLERY b. TOKYO／東京
　　gallery J2／東京
2006年　GALLERY b. TOKYO／東京

グループ展他
2003年　第3回夢広場はるひ絵画ビエンナーレ　　はるひ美術館／愛知
2005年　谷中日和2005　gallery J2／東京
　　Presentation & Exhibition　　アートコートギャラリー／大阪

The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊2007

発行日　2007年6月30日発行
定　価　1,000円（本体953円）
発行所　ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
発行人　吉村信夫
編　集　倉田妙子

holbein